

商代寶貝の研究

近藤 喬 一

1

柳田國男は晩年の大著『海上の道』で、幾重もの波頭を越えて琉球諸島へ寶貝（図版3-1）を求めてやってきた人々が、日本列島へ水稻農耕をもたらせたと考えた。日本の考古学はこの柳田の考え方に否定的である。しかし私は弥生中期の段階には、頭に鳥の羽根をつけ片手に武器、片手に楯を持ったシャーマンが銅鐸の音にあわせて踊るという形で農耕儀礼を主催した、あるいは海浜に近い集落では鳥装の羽人達が豊穡を願ってボート競争を行う儀礼があったと想定¹している。中国の華南に広がっていた農耕儀礼と共通する要素が多かったのではないかと思うのだ。そのような観点からみる時、柳田の発想は捨てがたい魅力を持っている。琉球王朝の尚巴志が宣徳9年（1434）明の宣宗に献じた貢物目録「歴代寶案」中には、螺殻8500個、海巴550萬個とある。伊波普猷によれば海巴は子安貝の事だ²という。琉球諸島は寶貝の一大産地であった事はまちがいない。

弥生時代の日本列島では、寶貝の出土は非常に少ない。長崎県五島列島の浜郷遺跡³からは、5号石棺からホシキヌタガイ〔*Ponda (Mystaponda) vitellus (Linnaeus)*〕が出土している。18号人骨の大腿骨横に副葬されていた。また出土状況は明確でないが1957年発掘された人骨には装身具に使用されたと説明のあるキイロダカラガイ〔*Monetaria moneta moneta (Linnaeus)*〕6枚が知られている。キイロダカラガイは背中が打ち欠かされている。時期は前期末から中期前半に比定されている。山口県土井ガ浜遺跡の砂丘につくられた墓の一つから、遺骸の上面に寶貝を模倣した貝製の寶貝を撒いていた事例⁴がある（口絵1、図版3-2）。神奈川県毘沙門洞C洞窟遺跡からは真貝（口絵3上）が幾枚か発見されている。貝は大きいけれどもハナビラダカラガイ〔*Monetaria (Ornamentaria) annulus (Linnaeus)*〕ではないかと思う。いずれも弥生時代中期に比定されている。また未発表資料として、京都府の日本海に近い所から、弥生時代中期の土器に寶貝がいっぱい入れられていた例が知られているぐらいである。五島列島、響灘に面した土井が浜、由良川の河口に近い日本海に面した地域は、いずれも南海産の貝が琉球諸島から奄美を經由して日本列島に持ち込まれた「貝の道」沿いの遺跡だといえよう。しかしいずれにしても弥

生時代には寶貝はあまり重要視されていなかったようだ。その原因は柳田國男が考えたように琉球の人々には、寶貝は中国への輸出品として掛け替えのないものであったことによるのか、弥生社会の人々には寶貝に伴う習俗が稀薄であったことによるのか興味深い。寶貝に伴う習俗とは再生の思想だと考えるが、弥生の段階に再生思想があったかどうかはいずれ稿を改めて検討したい。

問題は柳田が『海上の道』のなかで、中国のどの地方から琉球諸島へ寶貝を求めて人々がやってきたのかについては、まったく触れていないことである。中原の人々が直接やってきたと考えていたのだろうか。当時中国のどの地域の人々が寶貝を必要としていたのだろうか。商や西周の王達は確かに寶貝を欲しがったのだが、弥生時代とは時間的に差がありすぎる。こういった点もまだ十分に考え検討されていない状況なのだ。柳田が寶貝に関心を深めていた時、纏まった寶貝の研究としては、J. W. Jackson: Shells as Evidence of the Migrations of Early Culture, Manchester, 1917. があり、東アジアとくに中国の寶貝を扱ったものとしては、J. G. Andersson: Children of the Yellow Earth, London, 1934. や江上波夫「極東に於ける子安貝の流伝に就きて」(『人類学雑誌』第47巻第9号、1932年)があった。江上の研究に対する柳田の不満は、当時、中国の黄河流域で知られていた寶貝の産地について、南海産という言い方はしてもその南海は中国の南の方と言う意味で、琉球諸島は含まれていないということにあった。江上は以後も寶貝に対する関心を持ちつづけ、「東亜における子安貝の流伝」(『アジア文化史研究』論考篇1967、山川出版社)、Egami Namio: Migration of the Cowrie-Shell Culture in East Asia, "Acta Asia" vol. 26, 1974. さらに「子安貝(寶貝)の流伝にみる南海シルクロード交易と、子安貝文化のアジア・アフリカへの伝播」(『ユネスコ・シルクロード海洋ルート調査』奈良国際シンポジウム'91、1993)を発表している。江上は最新の論文でようやく琉球諸島の寶貝に注目しはじめている。しかしローレンツなどの寶貝の専門家⁵に言わせると、広範に棲息する同じ種の寶貝の場所を特定する事は、困難だという。琉球諸島を重視する柳田への回答は、この点で非常に困難なものを含んでいるといえよう。

商や西周の王達はどこから寶貝を入手していたのであろうか。江上の研究で一貫している点は、中国新石器時代に寶貝の存在を認めない点にある。寶貝愛好の風習は殷代から始まったとする。殷代の寶貝については小屯の殷墟を発掘した高去尋が優れた論文を発表した。「殷礼的含貝握貝」(『中央研究院院刊』第一輯、1954)である。ただ大司空村の14基の墓の状況を中心にしたもので、寶貝検出のデータが少なすぎたとは言えよう。1950年中

中国科学院考古研究所が設立されて以後、中国全土で非常に多くの発掘調査が行われてきた。それらのデータを集成し検討して新石器時代から漢代の間における寶貝の役割を明らかにする事は、重要と思える。今回は商代の寶貝の問題を中心にしておきたい。

寶貝愛好の風習が中国新石器時代には、認められるのかどうかを商代の寶貝を検討するに先だってみておきたい。

青海省大通県上孫家寨の一基の馬家窑期の残墓より、舞蹈紋のある彩陶盆（図版3-3a）が発見され『文物』1978-3に発表された。（青海省文物管理处考古隊「青海大通県上孫家寨出土的舞蹈紋彩陶盆」）。同時に海貝が1個出土したと、中国の報告書にしては珍しく写真を添えて発表された（図版3-3b）。この記述は謝端琚「黄河上游的馬家窑文化」（中国社会科学院考古研究所編『新中国的考古發現和研究』1984年5月）にも「其中属于馬家窑文化的約有一、二十座、而以384号墓尤為重要、随葬品較為豊富、有彩陶盆、骨紡輪、海貝、牛蹄、牛尾骨等、繪有五人連臂舞蹈紋彩陶盆、……」とある。また黄展岳「貝币探源」（『中国文物報』1994年1月3日）でも「史前期的随葬海貝仅發現于青海東部地区。年代最早的見于1973年大通県上孫家寨384号墓。海貝与舞蹈紋彩陶盆、骨紡輪、穿孔蚌殼、骨珠等同出。該墓属馬家窑類型、年代約公元前2800-2300年。……」とある。中国新石器時代にその他の地域では、この年代に匹敵する海貝の出土は私の調べた範囲内では無い。中原でも沿海地帯でも海貝が発見されていない時期に、なぜ、青海省のような内陸の地で寶貝が発見されるのであろうか。もしかすれば馬家窑期以後の彩陶文化は、中国よりもっと西方の彩陶文化の影響を受けており、海貝の出土はその事と関連するのではないかと私は考え、1994年9月14日-24日まで、資料の確認の為に青海省に旅行を試みた⁶。

青海省文物考古研究所の所長劉溥氏や盧耀光氏によれば、寶貝は攪乱土から発見されたものだから、上孫家寨出土の寶貝は馬家窑期のものとは時期を断定できないという教示を得た。また、青海省の馬家窑期のどの遺跡からも、これまでのところ寶貝は発見されていないという事である。盧耀光氏の教示によれば、半山期にはごくわずかの寶貝の出土が知られ、馬廠期には比較的多くなるとの事であった。私の調べた範囲内では半山期の寶貝の出土は確認出来ていない。盧氏からいただいた王麟「青海地区原始貨幣初探」（『青海金融』总第78期、錢币研究增刊、1991）には、「海貝和石貝：在半山時期的墓葬中、海貝曾有零星出現、并不多見、在馬廠中晚期墓葬中出土就比較普遍了。……」とある。馬家窑期

の寶貝の存否については、以上のべたように意見が二つに分かれておりどちらを信用して良いのか難しい。

青海省上孫家寨の馬家窑期の寶貝の出土が疑わしいとなると、中国の新石器時代中、寶貝の出現の最も早いものは、青海省柳湾遺跡⁷の馬家窑中期の資料である（図版2）。M1360からは海貝を模倣した石貝が3枚出土している。馬家窑晩期のM916から出土している海貝は形から見てキイロダカラガイと思える。M873から出土しているのは、ハナビラダカラガイであろう。安志敏は馬家窑期は河南の二里头文化と平行するという見解を発表⁸しているが、山東大学の栾丰実によればこれには問題があるということで、ここでは安志敏の意見はとらない（図1）。中原でも沿海地帯でも寶貝の出土が知られていない時期に、なぜ青海省のような内陸で寶貝が墓に副葬されたり、寶貝をわざわざ石で模倣してまで墓に副葬したりするのであろうか。先にも触れたように、江上波夫は新石器時代の寶貝の存在を認めず、高去尋の論文発表時には確実なデータは知られていなかった。現在の中国の考古学者達はこの点についてあまり深く考えてみようとはしていないようだ。

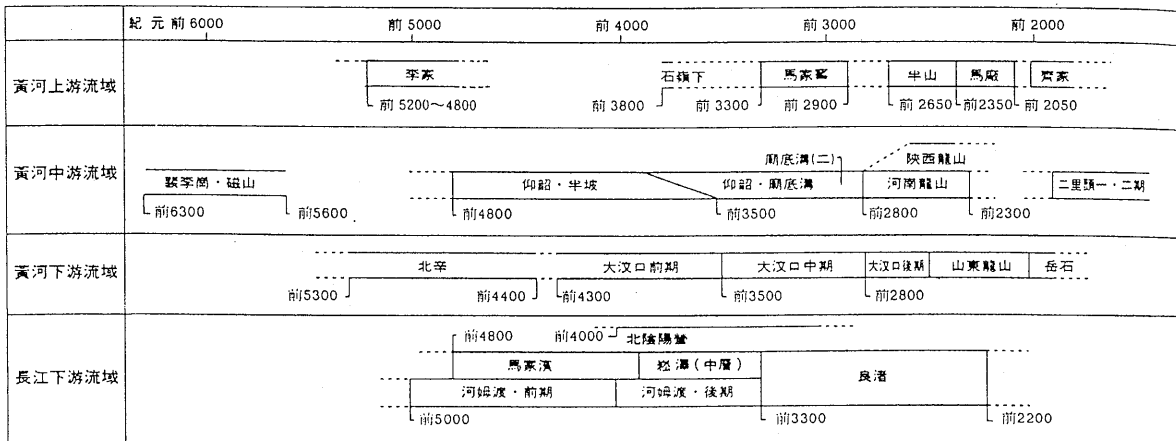


図1 新石器文化年代表

『中国考古文物之美1 文明曙光期祭祀遺珍 遼寧紅山文化壇廟塚』1994

寶貝が青海省に持ち込まれるルートとしては4つのルートが考えられる。

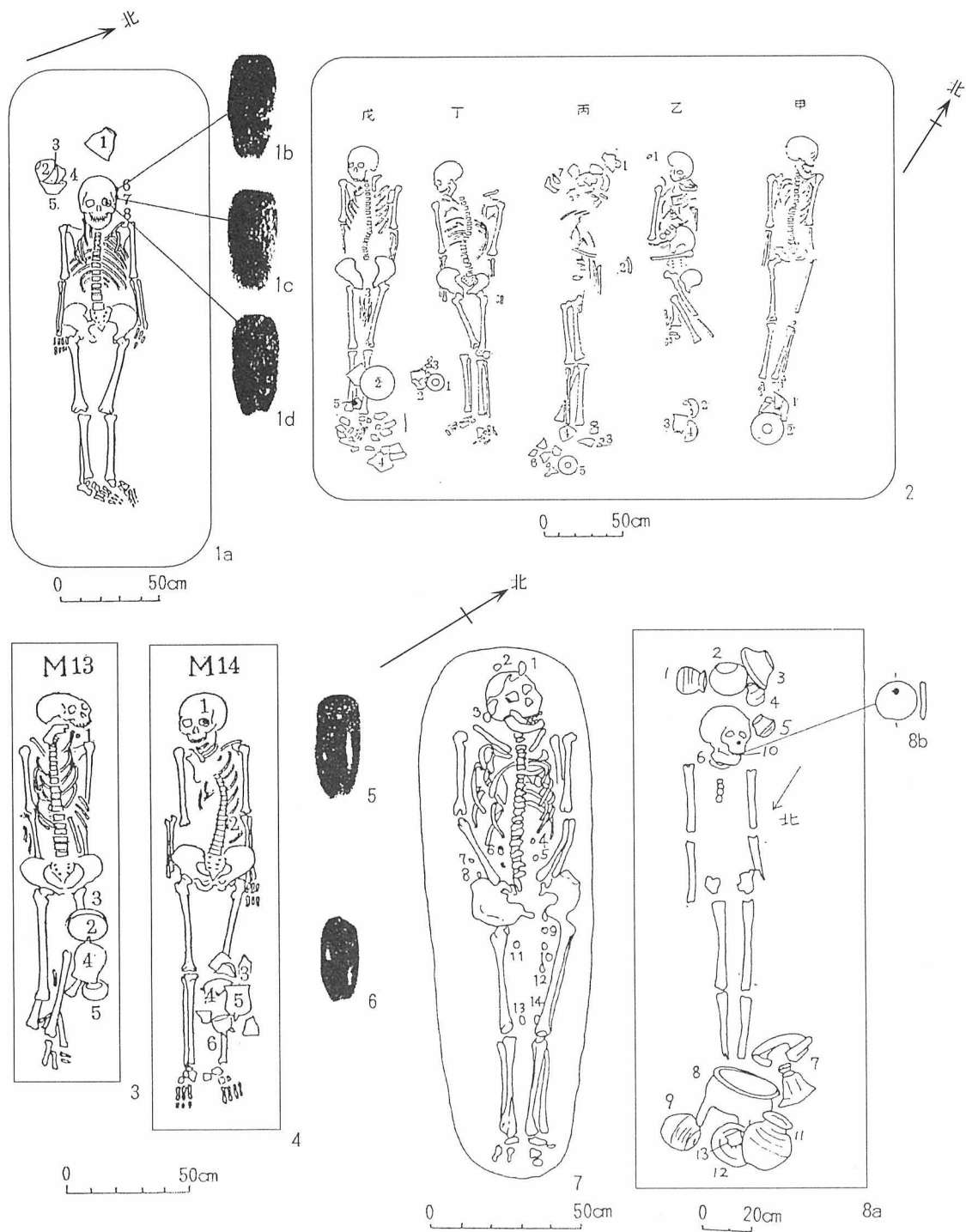
1. 沿海地帯を北上し中原を經由して甘肅・青海へ達するルート
2. 南嶺を越え、長沙→武漢→鄭州→黄河上流地域
3. (ビルマ) or (ヴェトナム) → 雲南 → 四川 → 甘肅・青海へのルート
4. 西方から新疆を経て青海に達するルート

1 の場合、山東省兗州王因の大汶口文化の墓からマクラガイが出土⁹している。マクラガイは寶貝と同じく南海産の貝であるという点を重視すると、馬廠期中期よりも早い段階に沿海地帯では山東までは南海産の貝は到達していたことになる。

注目すべきは陝西省宝鶏北首嶺の早期・中期墓から出土している榧螺である¹⁰。1977年調査の早期墓M9（図2-1）、M10（5人の男女合葬墓で二次葬を含む4人が榧螺を各1-2枚副葬している。図2-2）、M13、M14（図2-3・4）、M18と1978年調査の中期墓M7に榧螺が1-2枚副葬されている。図示されている状況から見るとM9の3枚のうち1枚の榧螺とM14の1枚の榧螺は眼高のなかに入れられた、あるいは入った状況である。M13の榧螺はもしかすれば口中に含まれていたかも知れない。報告書の図版では螺塔の有無がわからない。榧螺は海産のマクラガイ科の貝の可能性もある。北首嶺の早期・中期は仰韶文化半坡類型の下層文化と年代的に近いと言われる。大汶口文化早期より少し早いか、少なくとも平行する時期と考えられる（図1）。北首嶺で出土した榧螺が南海産のマクラガイだとすると、山東を越えてマクラガイがさらに中国の内陸、陝西省にまで達していたことになるが確実にマクラガイだとは言えず類例の増加を待ちたい。

2 の場合、寶貝を模倣した骨貝が湖北省宜昌の春秋晩期墓¹¹から出土している。それ以前には、調べた限り湖南省や広東省で寶貝あるいは寶貝を模倣した貝は出土していない。南嶺を越えて中原へ文物が搬入されるのは、春秋期以後ではなかろうか。香港南Y島大湾から出土した牙璋は器形は西周中期¹²だとのことだが、出土遺構の年代を特定する物ではない。新石器時代にこのルートを通じて中原や青海に寶貝がもちこまれた証拠はなく、また考えがたい。裴安平は中原商代の寶貝や亀甲の見返りに沿海地帯を経由して「牙璋」が広東や香港に持ち込まれた¹³のだとは言っているが、新石器時代の寶貝については問題にしておらず、2のルートのことも考慮していない。

3 の場合、云南省石寨山の滇国の墓地から銅鼓形貯貝器が多数出土し、なかに大量の寶貝が入れられていたことは有名¹⁴である。これらの寶貝はモルジブ・ラッカデブ諸島からビルマを経由して云南へ持ち込まれた。あるいは広東省から珠江を北上して持ち込まれた可能性は高い。しかし云南からさらに北上して青海まで搬入されたかどうかは問題である。云南から青海への途中ということになると四川省広漢県の三星堆祭祀坑から発見された大量の寶貝¹⁵が問題になろう。三星堆祭祀坑の年代については商代の中期・後期説があり、林巳奈夫説は一部の遺物は西周中期まで下る¹⁶という。青銅器の器形や紋様には中原の商文化と共通するものが確実にある一方、人頭形の青銅器とか巨大な仮面とか台座を含める



- 1 a. 寶鷄北首嶺77年調查M9号 (6・7・8. 榧螺) 1b~1d. 榧螺
 2. 寶鷄北首嶺77年調查M10号 (甲: 1. 榧螺 乙: 1. 榧螺 丙: 7. 榧螺 戊: 1. 榧螺)
 3. 寶鷄北首嶺77年調查M13号 (1. 貝) 4. 寶鷄北首嶺出土77年調查M14号 (1. 貝)
 5. 寶鷄北首嶺77年調查M18号出土榧螺 6. 寶鷄北首嶺出土77年調查F35号出土榧螺
 7. 姜寨M275号 (1~14. 貝飾) 8 a. 崧澤M60号 8 b. 玉器

図2 新石器時代含貝・含玉出土例

と軽く2.5mを越す青銅人物立像とかこれまでの中原の商や西周文化には全く知られていなかったものもある。祭祀坑から出土した寶貝の年代が商代のものか、西周時代のものか特定するのは難しい。商代後期や西周代のものだとすると、後に検討するように1の沿海地帯を北上し山東経由で中原に持ち込まれた寶貝が、さらに陝西省を經由して四川に持ち込まれた可能性は高いと思う。童恩正は中原の外回りに広がる非漢的世界を、細石器文化や箱式石棺や一部の青銅器の共通性を指標として、半月形文化圏としてとらえるという優れた発想¹⁷を提示した。遼寧と青海や四川・雲南が彼の考え方だと結びつくことになる。雲南や四川出土の時代をそれぞれ異にする寶貝の存在をとらえて、新石器時代の青海地域の寶貝の出現を童恩正の考え方を援用して3のルートによるのではないかと主張するには、まだ十分な証拠がないと考える。

4の場合、新疆の状況を最も知りたいところである。張玉忠¹⁸によれば、海貝の主要な発見地は天山東部のハミ盆地、トルファン盆地と天山以南のタリム盆地の周縁地帯の漢代以前の墓葬からである。天山以北地区では発見は比較的少ない。海貝はハミ市天山北路墓群（甘肅東部の四壩文化との関係が深い。個別の遺骸の頸部近くに少量の寶貝が発見される。）・ハミ市五堡墓群（C14年代測定によれば、今から3000年前くらい。一部の墓から相当数量の海貝が発見される。長2.5, 寛1.7cmで死者の帯飾、鞋飾、衣飾に用いられている。種類は貨貝[キイロダカラガイ]と環紋貨貝[ハナビラダカラガイ]。人骨の鑑定によると、蒙古人種の成分と欧州人種の成分がある。）・ハミ市焉不拉克墓群（M6の50歳以上の男性の小腿の上に海貝3枚、五堡墓群とほぼ年代同じ）・鄯善県洋海墓群（少量の海貝と一枚の銅貝、海貝長2, 寛1.3cm。西周から西漢に相当する時期）・托克遜県天山阿拉溝墓群（西周より秦漢時期のトルファン盆地の姑師人の墓地。少なからず海貝があり死者の頭側・腕の傍ら・個別には死者の口中に含む）・ロプノール地区の小河地帯（スエーデンの貝格曼の発掘した青銅時代の墓葬。海菊類の貝2枚を含む装飾品出土。海菊は一種の海貝で東亜沿海から持ち込まれた物ではないかという。）・和静県察吾呼溝墓群（西周から春秋時期のM102の小陶罐内から6枚の海貝を発見。死者の身の傍らに海貝を置いてもある）・温宿県包孜東墓群（紀元前後のM41から海貝21枚[長2.8, 寛1.9cm]、銅貝17枚。人骨は蒙古人種の大部分の特徴とともに白色人種の特徴も一部もつ）・タクラマカン砂漠の南縁、洛浦県山甫拉墓群（戦国末―東漢初のM1より海貝5枚。海貝は一端に小孔あり。韓康信によれば欧州人種地中海支系類型の形質だという）・木壘県南郊墓群（春秋戦国時期の墓から胸前に海貝を掛けた一基の墓。壮年男性）・巴里坤県湾溝古墓（漢代の墓で1基から

海貝出土)から出土している。なお楼蘭古城・漢晋時期の精絶国の故地尼雅からも海貝は出土している。

和田の玉が殷墟婦好墓からは大量に発見されており、云南省江川の春秋戦国時期の李家山古墓出土の玉器も新疆和田の産だという。新疆東部のハミ盆地やトルファン盆地とロプノール地区は甘肅や青海と隣り合っており、甘青地区の辛店文化や四壩文化、河西走廊の沙井文化と密接な関係があった。甘青地区では、海貝は馬家窑文化の馬廠類型に出現し、そのご齐家文化(図版2)・辛店文化・四壩文化・沙井文化にもいずれも海貝は存在する。安志敏は甘青地区の海貝は中国の東南沿海からきた(そのルートは示していない)というが、新疆東部の海貝もこれら甘青地区の海貝と関係が深いと張玉忠は考えている。一方新疆南部のカラコルム山はインドと隣接している。古代インドも海貝を副葬する風習は非常に古くからある。穿孔されており、死者の目を覆う役割を果たした。東パミールの塞克時期の墓からも同様な海貝が少なからず発見されている。これらの海貝はインドからもちこまれたもので、インド洋沿海の産であろう。パミール以東の新疆地区出土の海貝は、発見の状況から見て装飾品で、インドや東パミールのように目を覆うといった風習は認められない。新疆地区の海貝の風習は中原の文化伝統の影響が大きく、パミール以西とは繋がらない。従って新疆出土の海貝はインドからもちこまれたものではなく、インド洋沿海産のものだとは考えにくい。新疆の海貝の出土状況も含めて少し長くなったが張玉忠の論文を引用した。以上の資料を見る限り、新石器時代の海貝の確実な資料は、新疆ではまだ発見されていない。

いずれのルートも現在のところ中間の地域における確実なデータを欠いているために断定は出来ないが、中国新石器時代には寶貝が確実に存在し、その搬入のルートを明らかにすることによって、もしかすれば彩陶文化のある時期以後の西方からの影響の可能性を再検討するきっかけになるかも知れない。

高去尋の指摘した寶貝を口に含む、あるいは寶貝を手握るという点ではどうであろうか。物を口に含むという点では、山東龍山文化に先行する大汶口文化の段階に兗州王因と大敦子の墓の人骨の頤骨に異常な変形¹⁹が認められることである。臼歯外側が激しく磨損し、酷い時は内にちじんでいる。数例は変形したところに小石球か陶球を置いており、変形は長期に小球を含んでいた事による。これは大汶口文化特有の奇妙な習俗である。しかし、この場合は生前に口の中に物を含む風習で、死後に物を含ませる風習とは異なるといわれるかも知れない。死者に物を含ませる風習として中国新石器時代で特に顕著に認めら

れるのは、同じく山東省で認められる。

山東省膠県三里河大汶口文化の66基の墓葬中、墓の主人の口中に玉瑯を含むものが12基（図版1）ある。瑯は鏃形の玉器で、装飾品としても使用されたものだ。このほかに、M275（図版1-1）の男性の墓主人は口中には玉の鏃形器を含み、さらに1枚の大型の骨針をくわえていた。時期はM275・M2110は大汶口文化晩期のうち少し古く、M229・M249・M279・M288・M295・M296・M2101は大汶口文化晩期で、M215・M259・M286は晩期の中でも最も新しい。さらに膠県三里河の龍山文化の98基の墓葬中、口中に玉瑯をもつ墓はM118とM244の2基だけであるが存在する。M244は龍山文化早期に相当し、墓主は口中に1件の弧形玉器を含んでいる（図版1-7）。一端には穿孔がある（中国社会科学院考古研究所編『胶县三里河』1988年3月）。調べた限りの範囲で、中国の新石器時代文化のうち、墓の被葬者が口中に物を含む例は、山東省膠県三里河の大汶口文化の事例と龍山文化の事例のほかに、江蘇省青浦崧澤2期²⁰のM60（図2-8）・M92と崧澤3期のM82で男女をとわず玉瑯を含んでいる例がある。大汶口文化中期にほぼ相当する時期にあたる。年代的には山東より江蘇のほうが早いと言えるかも知れない。

なお陝西省臨潼県姜寨²¹の第1期文化に属するM275は長方形竪穴土壙墓で壮年男性が仰臥伸展されている（図2-7）。副葬品は孔を開けた小貝飾30枚で、口内3、頭部10、腹部8、股骨右側4、腰骨下両肢内側5枚とある。M268は長方形竪穴土壙墓で、壮年男性が仰臥伸展されている。この墓は攪乱されていたが、口内に10枚の小貝殻を含んでいた。いずれも出土した貝がどんな種類のものかよくわからない。付録の姜寨出土動物群にあげられているのは、田螺しかない。姜寨1期は仰韶文化半坡類型に属する。わずかなこういった例をとりあげて陝西が早い、いや山東だということにはむしろ問題があると言うべきかも知れない。姜寨2期の墓葬中には、先のような例は認められず後につづかない。

死者の手に物を握らせる風習はどうであろうか。山東大汶口文化や山東龍山文化では死者の手にノロ鹿の牙で作った鉤形器と名づけられているものを、男女を問わず握らせていることが認められている。金関丈夫は勾玉や弥生時代の巴型銅器に見られる鉤状の形は、死者の魂を結びつける役割を果たした²²と考えた。ノロ鹿の鉤状器についても甲元真之は同じような役割を果たしたのではないかと言う。その当否はしばらく置くとしても、死者が手に物を握る風習も最も早い段階は山東大汶口文化に認められるということには変わりがない。

注目すべきは寶貝とは種を異にするが、同じく南海産の貝であるマクラガイの出土が報

告されている。朱活によれば山東省兗州王因大汶口M2575からマクラガイ (*Oliva mustelina* Lamarck) が35枚出土したが、これらは背に穿孔がない。(朱活「古幣三談」－談我国先秦貨幣的龜貝、朱玉、金銀－『中国錢幣』創刊号、1983)。

口中に物を含む風習や、手に物を握る風習は、中国新石器時代の文化のうちでも山東の大汶口文化に最も顕著に見られ、山東龍山文化にもわずかにひきつがれたようだ。陝西省宝鷄北首嶺の例や陝西省臨潼姜寨の例は稀少な例であり、しかも後へつづかない。江蘇省崧澤の場合は同じ大汶口文化に属した風習だとも言えよう。これらの風習と、寶貝と同じく南海産の貝であるマクラガイの墓への副葬を結びつけて、後に指摘するように商代中期に初めて認められる口中に寶貝を含む風習は、大汶口文化の段階にその起源をもつと推定しても問題は無いであろうか。山東省内の龍山文化より後の時代の墓葬からは関連資料の発見はまだ聞いていない。商代後期の高去尋のいう含貝握貝の風習の先行形態とするには両者の間の年代の開きが多きすぎると言えよう。ただ張光直は殷商文化と大汶口文化とが共通に備えている特徴として、厚葬、木槨と二層台、龜甲をもちいた占ト、いくつかの土器の形式と白陶、骨製の匕、骨製の彫刻品、緑松石の象嵌と装飾につかわれる文様、大汶口文化と山東龍山文化の抜歯をあげており両者の親縁性を推定²³している。そういった観点が許されるとなると南海産の貝の副葬と口に物を含む風習や手に物を握らせる風習もつけ加えて良いかもしれない。

2

中原の二里头Ⅰ－Ⅳ期は1900B.C.－1500B.C.に相当する。安志敏の『考古学報』1987－2の論文によれば、馬廠期の一部は中原の二里头期と平行する事になり、馬廠期になって一般に見られるようになる寶貝愛好の風習は青海地域が早いのか中原の影響のもとに始まったものか問題となるが、安志敏の論文そのものに疑念を表するむきもあることは1節で触れたので、ここでは取り上げない。張光直²⁴は夏代(2205B.C.－1766B.C.)、商代(1766B.C.－1122B.C.)の年代を考えている。商は前18世紀東方からやってきて夏王朝を征服したという。ここでは二里头Ⅲ期いごを商代とする立場に立つ。

寶貝が中原に登場するのは二里头Ⅲ期に比定されている二里头の宮殿遺跡の北約550mの長方形竪穴墓K3²⁵(図版3－4 a. b)から出土した貝12枚が最初である。貝は背に1孔穿孔されており、形から見てキイロダカラガイと思える。貝は棺内北の玉戈・玉鉞・圓形銅器・緑松石飾・骨串珠と共に出土した。貝は装身具の一種であろうか。これ以上の記

述がないのでわからない。棺の上層からは銅戈・銅鉞・銅爵・銅盃・円泡形銅器等が出土しており、当時の貴族階級の墓かという。鄭若葵「論二里头文化類型墓葬」(『華夏考古』1994-4)で検討すると、寶貝の出土は二里头Ⅰ期とⅡ期にはなく、Ⅲ期とⅣ期に認められる。彼は大・中・小型墓に分けているが、寶貝は中・小型墓に限られている。この段階では後に述べるような商代後期の大型墓への寶貝の副葬が集中する現象は認められない。

河南省陝県七里鋪の楕円形灰坑(H351:16)から骨貝(図版3-5)1個が出土したとあるが、骨貝の出土状況には触れていない。時期は郑州二里岡下層より早い。骨貝は背面は平で、丸味を帯びた腹面には縦に溝状の筋をほりこみその左右には横向きに歯状の筋をいれている。一孔をもつ。本来の寶貝とは腹背が逆になっているが、光滑で真貝の形と非常に良くにているという。(黄河水庫考古队河南分队「河南陝県七里鋪商代遺址的発掘」『考古学報』1960-1)。

二里岡下層より早い時期ということだと河北省磁県下七垣でも知られる。(河北省文物管理处「磁県下七垣遺址発掘報告」『考古学報』1979-2)。第3層は郑州二里岡下層よりも少し早い商代早期でここから貝1枚が出土した。なおH103は蚌殻の窖蔵があり、これも同じ時期である。

河南省郑州上街遺跡(河南省文化局文物工作队「郑州上街商代遺址発掘報告」『考古』1966-1)ではM64(二里头期)から骨貝2枚が出土している。M64は長方形堅穴土壌墓で、仰臥伸展葬、東西方向に葬られ顔は北を向く。両手は腰に置き両足に骨貝各1枚を発見。獣骨を磨いて作り楕円形の一端は狭く一端は広い。上面はもりあがり、下面は平ら。上面に縦に一凹槽を刻む。その両側に横に刻みをいれている。窄端に近く一円孔をもつ。長1.7最寛1.3cm、別のは長1.9、最寛1.4cm。時期は明確ではないが他にも骨貝(T1:24)長2.4、最寛1.8cmのもの1枚(図版3-6a)。頂端に近く一窄孔あり。孔下に縦に凹槽をいれその両側に刻みをいれ貝に似せてある。石貝(H6:2)長2.2、中寛1.7cm、厚0.6cmで正背両面に縦に凹槽を入れる(図版3-6b)。

河南省輝県琉璃閣²⁶では53基の墓のうち8基の墓から貝が出土している。

墓号	区	型	葬式	狗	盗掘	副葬品
M158	北	小	俯身	2	否	貝1
M203	北	小	仰身		否	貝1 銅爵(1)1
M204	北	小	俯身	1	否	貝1
M205	北	小	俯身	1	否	貝1

M208	北	小	仰身	1	否	貝1
M221	北	小	仰身		否	貝1
M239	北	小	仰身	1	有	貝2
M247	南	小	仰身		有	貝1

報告者によれば琉璃閣の北区と中区は安陽小屯前期と郑州二里岡 I 期に相当し、南区は安陽の小屯期に相当し下限は殷末周初にあたるという。海貝の写真も図もない。記述によれば、尾部にすべて一小孔を穿しその出土位置はM221が胸部外にあるほかは、7基ともすべて腰部付近にある。腰に懸ける装飾品かという。

河南省登封王城崗²⁷WT16M14（二里岡上層）

俯身直肢で一男性成年。副葬品は陶鬲1、銅戈1、銅鏃2、骨鏃1、玉器1、海貝1。玉器と海貝は右手の傍らに置いてあった。貝は背に1孔を持ち形から見てキイロダカラガイと思える（図版3-7 a.b）。

河北省藁城台西²⁸では112基の商代墓葬のうち8基の墓から10枚の寶貝が出土している。出土位置は人架の口内あるいは腰間で、大小は一様でなく、尾部にはすべて一小孔をあけるとある。M49のは長2.8cm、M101のは長1.7cm、M49はたぶん貨貝（キイロダカラガイ）であろう。墓の時期は台西 I 期が二里岡上層期、あるいはやや遅い時期で、台西 II 期は刑台曹演庄下層あるいは殷墟文化早期に比定されている。注目すべきは台西 I 期に比定されているM103で、3人の被葬者はすべて男性で俯身葬。棺内の墓主だけ口中に貝を含んでいた（図版3-8 a.b）。貝は形から見てキイロダカラガイと思う。中原の資料のうち口中に寶貝を含んでいる最古の確実な事例である。

槨外上と二層台上に殉人がいるが、二葬台上の人物は膝から下の下肢骨を削られている。墓主の右足下に牛の肩胛骨を用いた完形の卜骨3枚を含む副葬品が検出された。‘卜用三骨’と言うことについては、郭沫若がかって論じた²⁹ことがあったが、この被葬者の身分は卜人ではないかと報告者はいう。他に卜骨を伴う墓は台西 I 期に属するM14と台西 II 期に属するM12, M56, M61がある。M14とM56ではM103と同じように完形の卜骨3枚をいずれも副葬していた。M103いがいの卜骨を伴う墓からは貝の出土はない。卜骨を副葬する（特に完形の卜骨を同時に3枚もつ）人物が卜人という身分であったとすると、それと口中に貝を含ませるという行為との間に何らかの意味のある関係を認めてよいであろうか。口中に貝を含む事例の初現が、卜人身分と推定されるような特殊な人物だったという事は重要だと私は思う。E.スミスが言うような貝と女性性器の類似から連想される再生思想の

観念の創造が認められるならば、中国の新石器時代から商代前期・中期にかけては、後の貞人に先行するような役割を果たした人物が、その最初の役割を担ったということは非常に興味深いといえよう。

商代前期・中期の寶貝のありようは以上の諸例から見てどのように考えられるか。中原で確実に貝が出現するのは二里头Ⅲ期からである。あまり時をおかず真貝を模倣した骨貝や石貝も出現している。分布は河南省を中心にして北は冀中平原の滹沱河畔、河北省藁城台西まで達している。河南省では鄭州を東端、西は陝県七里鋪、南は登封王城崗、北は輝県琉璃閣という範囲になる。商代前期・中期・後期の首都がその範囲内に含まれていることがわかる。貝は種の同定できる資料から見て貨貝（キイロダカラガイ）が主流であった可能性が高い。しかし出土数量は少なく、特定の人物に圧倒的多量が集中するといった様子は窺えない。出土状況のわかる偃師二里头Ⅲ期の墓と王城崗の墓では、いずれも副葬品に銅戈をともっており戦士と関係が深い。輝県琉璃閣の例では、貝を伴っている墓が他の墓よりも墓の規模とか構造とか副葬品で優位を占めているとは必ずしも言えない。出土位置は一定せず、腰付近、足下、手の近くなどと異なる。高去尋が商後期の安陽大司空村で14基の墓葬出土例から推測した含貝握貝の風習については、含貝の例が二里头上層期かすこし遅れる時期に比定されている河北藁城台西M103で知られた。中原における含貝風習の初現である。卜骨3枚を伴っており卜人かと推定されている。王城崗の例は右手に持っていたのかもわからないが、確定出来ない。

3

商代後期すなわち安陽期については、高去尋の論文が発表された後、資料が増加しているが集成し分析された事がない。江上波夫の研究もデータが古い。殷墟（図版4-1）の王陵については編年³⁰にいろいろの見解がある。楊錫璋「安陽殷墟西北崗大墓的分期及有關問題」（『中原文物』1981-3）では、小屯では『古本竹書紀年』の言う盤庚、小辛、小乙の時代の遺物や甲骨文字、墓など発見されておらず、侯家莊西北崗の大墓群も殷墟文化Ⅱ期以後だと主張する。彼の見解に従うと四道の墓道をもつものは殷の王陵（図3）で、その時期と順序は次のようになる。

殷墟文化Ⅰ期 侯家莊西北崗59M1、小屯YM232、YM333

殷墟文化Ⅱ期 M1001（武丁）、M1550（祖庚）、M1400（祖甲）、武官村大墓

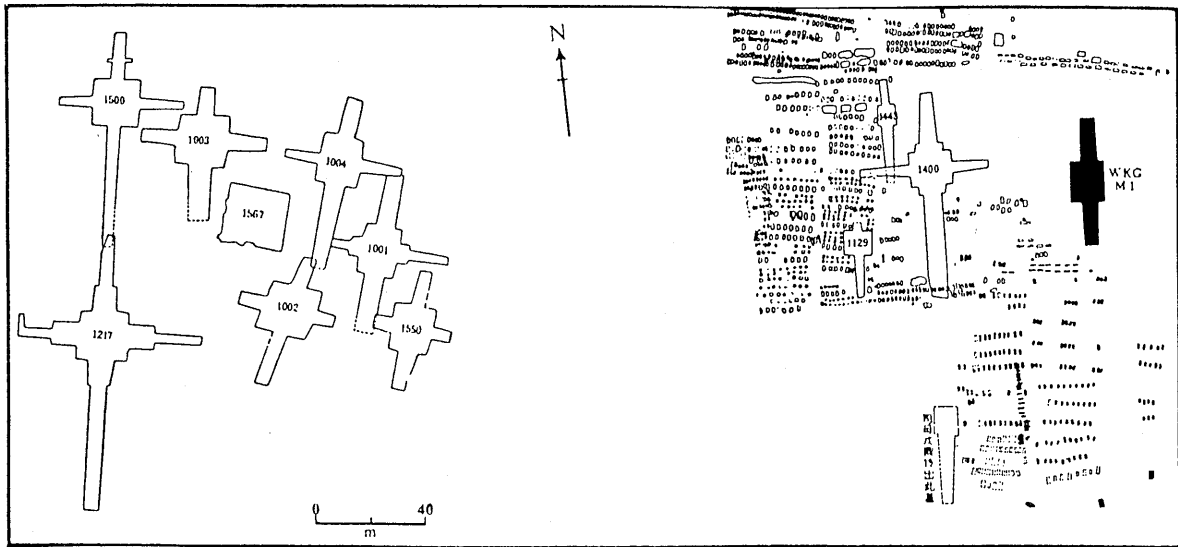


図3 河南省侯家莊大墓と排葬坑分布図
Kwang-chih Chang, The Archaeology of Ancient China, 1986.

司母戊鼎墓、(M1443、M1129)、婦好墓

殷墟文化Ⅲ期 M1004 (廩辛)、M1002 (康丁)、M1500 (武乙)、M1217 (文丁)、
山東益都蘇阜屯M1

殷墟文化Ⅳ期 M1003 (帝乙)、M1567

殷墟文化Ⅰ期には王陵は無いという。〔今回の第1回商代国際学術討論会で、鄭振香氏は侯家莊M1001の年代は武丁より早く、殷墟文化Ⅰ期の晩期に相当するという見解³¹を発表した。〕では盤庚達の墓はどこにあるのか。侯家莊M1500とM1217を殷墟文化Ⅰ期とする邹衡の見解³²や、西周の昭穆制と同じように兄弟による乙丁制が殷代に存在しそれが西北崗の東西の大墓群に反映しているという張光直の見解³³も退けて、曹定云「殷代初期王陵初探」(『文物資料叢刊』10-1987)は次のように言う。1。婦好墓、司母戊鼎墓、武官村大墓は武丁の法定配偶である妣辛、妣戊、妣癸の墓に相当する。2。後崗で発見された中字形の大墓はM32、M48、M48東(未掘)、1933年調査大墓の順になり、それぞれ盤庚(M32)、小辛(M48)、小乙(1933年調査大墓)に比定されるか、四墓が陽甲、盤庚、小辛、小乙に比定されるのではないか。盤庚は兄陽甲を殷に葬ったとある文献の記載にも適合するのではないかと主張した。誰の編年が一番正しいかの検討はしばらく置き、ここでは楊錫璋の見解に従って各墓での海貝の在りようを検討しておきたい。

殷墟文化Ⅰ期

石璋如「河南安陽後崗的殷墓」(『国立中央研究院歴史語言研究所集刊』第13本、1948)

によれば、後崗の大墓とは、洹河に一番近い中字形大墓である。1933年11月15日－1934年1月24日まで調査。（後崗では大墓1と小墓5を発掘）大墓は中字形の平面で中央には亜形木槨をもつ。腰坑あり。徹底的に盗掘を受けており残った遺物も原位置をとどめているとは思えない。雑骨477、（南墓道攪乱土中人骨148）、（墓室内より）人頭28というのが目につき蚌殻、蚌泡、蚌魚、蚌飾といった二枚貝製の装身具類の他、貝6枚が知られる。貝は未だ磨製されていない天然貝だという記述があるが種類の同定もされず、写真も図も無い。南墓道内には車坑がある。なお大墓ではないが、殷墟文化Ⅰ期に比定されている小屯YM232、YM333から貝は出土していない。

殷墟文化Ⅱ期

a. 侯家莊M1001大墓³⁴ 中央槨室は徹底的に盗掘破壊されていたため、婦好墓のように墓主を直接比定する手がかりも、貝の出土の有無もわからない。殉葬墓（図4）中の貝

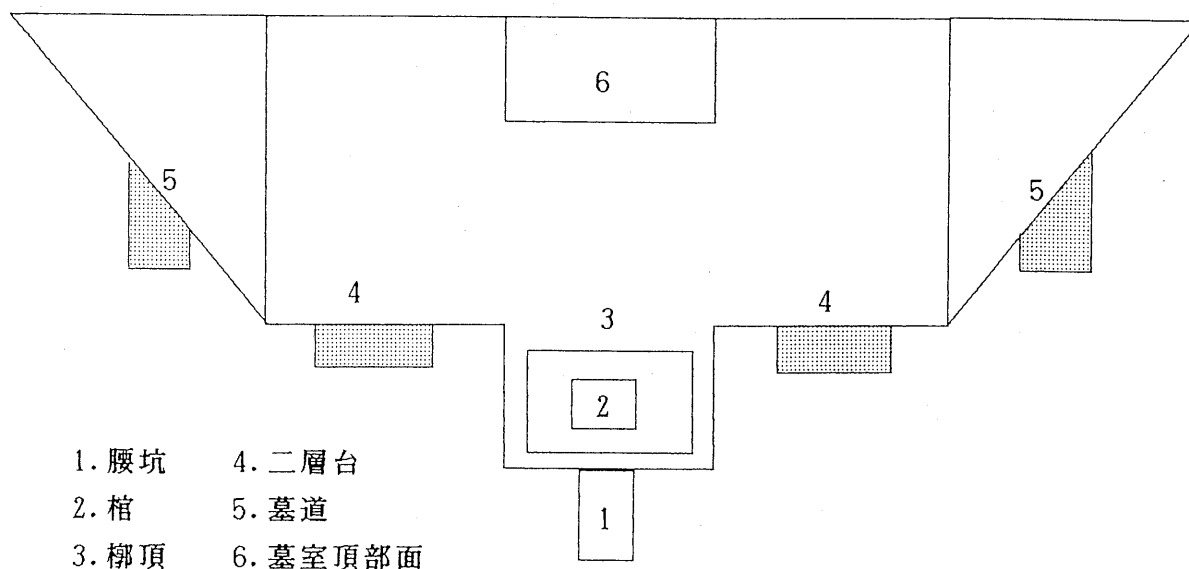


図4 大墓殉葬者位置模式図

の出土状況についてのべる。

1 墓坑底の殉葬者 9人は中央に1と南北の突出部東西に各1+1といった状況で埋められている。横向きか俯身葬で下肢は曲がるか曲げて重ねられている。中央の人物だけ石戈を副葬し貝若干（図から6枚は确实、ただこの坑だけ盗掘の影響あり）を持ち（図版4-2）、他は銅戈を各自1ずつ持つが貝は無い。狗を1頭ずつ伴う。すべて壮年男子で狗は成犬である。墓主を保衛する武装の侍従で下方からの邪気の来襲の危険を防禦するものか、

奠基の犠牲の意味も含んでいよう。奠基の原義は鬼神に建築の成功を助けることを求め、長く完整を保つように祈ることである。

2 正坑内木室外側の殉葬者 1人。正坑西南角内で俯身葬1体、古代の盗掘で上半身は破壊されており下半身も攪乱されてはいるが、坐骨下に貝4枚があった。無頭だったか確認しようがないが、木室の外側を土で埋める時に人の殉葬があった。

3 木室頂面層上の殉葬者 11人。亜形の北の西隅6人。木棺で仰臥伸展葬、緑松石を貼布した頭飾りをかぶっているから女性か。1人だけ銅戈を持っている。妃嬪婢妾の類かと。このグループは貝なし。

4 墓道中の殉葬者 墓坑をもつ者2人、北道と西道中。北道の人は小腰坑を持つ。盗掘されていた。攪乱された人骨が緑色に染まっていたので銅器の副葬のあった事がわかる。貝なし。西道の人は仰臥、頭東、下肢はわずかに曲がる。未成年の人。銅觚、銅爵、銅鬲鼎、銅鼎各1、化粧用の円形陶餅（凸面に紅色がなお残る）。青銅容器はすべて破壊された後、埋められた。首を欠く人骨が主として南墓道から8組59具見つかっている。副葬品は無い。

5 墓坑東側の殉葬者 人坑22、馬坑7、内容不明2。貝を持つ者があり列記する。

M1511 俯身3、仰身2 上仰身者は左手に6貝を持つ。

M1588 俯身1、仰身1 西仰身者は臂上に杯形銅器6、身上に貝5

M1775 俯身2 西具腰肋の際に貝10、東具腰肋の際に貝5

M1588とM1775はM1550の西道で破壊されている。

M1881 俯身1 肩の南に貝1

M1887 馬骨3 銅、貝、轡飾、鈴3

M1911 馬骨4 銅、貝轡飾（図版4-3）

M2017 馬骨3 銅、骨、貝、緑松石、轡飾、鈴

M2041 俯身1 項際に貝10

M2043 俯身3 西具口中に貝1（本文P55では貝数枚）。盗掘されている。

馬坑の各馬はみな極めて華麗な轡頭をつけている。上には銅、貝、骨、緑松石を飾り、帯には小銅鈴をとりつけていた。M1885を領班とする墓主生前の田獵歌舞燕楽の侍従かという。M1885は早期に盗掘を受けていたが、なお銅爵、銅觚、銅鳥尊をはじめ車馬飾若干、鏃、狗2の副葬品が残っていた。

大墓の殉葬者の全体の残りが比較的よくて、貝の副葬状況を検討できるのはM1001大墓

ぐらいである。貝をもつものと、もたぬものに何らかの階層差や身分差が存在するのか、また役割の上で差があるのか検討しうる例と思うが明確な特色を抽出できなかった。今後の検討課題であろう。

貝の個別の記載は田野記録によれば、貝 (Cowries) は127枚出土。背に皆孔あり。孔が窄製か磨製か、貝の種属、形体の大小など実物をまだ見ていないので、不詳とある。他に4種類—芋貝 (Cones)、蛤などがある。寶貝に関係あるのは図が1点 (図版4-4a) あるだけ。形から見てナツメダカラガイモドキ=拟棗貝 [*Erronea erronea* (Linnaeus)] かとも思うが、螺塔があるのでマクラガイ=伶鼬權螺 (*Oliva mustelina* Lamarck) であろう。しかし大きさは成貝のそれぞれより小さい。

b. 侯家荘M1550大墓³⁵ 墓坑内で破壊をまぬがれたのは、北部のごく一部と東北・東南・西南三隅だけで殉葬坑ののこっているのは4基だけである。

M49 墓壙東北角の殉葬坑 (図版5-1)。地表下7.89-8.0mの夯土中。人骨1、満身に紅色を塗る。仰身で頭は南向き。一貴婦人で頭上に骨簪を孔雀の尾を広げたように60-70枚以上挿している。白玉製簪が1本額上にくる。結婚の時新婦の戴く鳳冠のようで、白玉製の簪で髪に留めたのかもしれないが確定のしようがない。殷代貴族階級の婦女は高髪だけでなく、極めて複雑な髻も結っていたと推定される。佩玉—白玉彫兔、緑玉彫蛙、璧、玦各1がある。頭の横と足の先には銅爵、銅觚、銅鼎各1があり、胸際、蛙や璧の東には白玉戈1があった。殉死者の持つ儀式用の武器と思える。右手には、貝4枚を握っている。死者の身上に紅色顔料を埋葬時まいた。殷墓中、赭石撒尸は常に見られる現象である。

主体部の寶貝は翻葬坑内曾出土了器物という項に、貝266枚とあるだけである。

c. 婦好墓³⁶ 出土した大量の青銅器の銘から武丁の配偶、婦好に比定された墓からは、ヤクシマダカラガイ=アラ伯綬貝 [*Mauritia (Arabica) arabica* (Linnaeus)] 1個、殻高6.1cm、背面に一孔が穿けられているものと、キイロダカラガイ=貨貝 [*Monetaria moneta moneta* (Linnaeus)] 6880余枚 (図版5-4d) が出土している。後者のうち70枚は墓口からの深さ4.3mのところ、墓室中部のやや北に偏った填土の中から出土した。その他の大部分のものは、棺内西側の腰坑にごく近い所から出土した。基本的に大小の2種があり大は長2.4cm、小は約1.5cmで、大部分のものは殻の前端に一個の円形孔をあけ、少数のものは背面をすり磨いて長形の比較的大きな一孔をあけてある。他に緑松石を琢磨して海貝に似せたもの6個 (図版5-4c) が出土している。黄緑色のもの4、黒色のもの2個で、背面前端にいずれも一小円孔をもち、腹面側には唇歯を本物の海貝に似せて彫

り出している。形からみてキイロダカラガイを模倣したものと思える。貨幣用に作られた可能性があると報告者は言うが、根拠はない。長1.3-1.7cm、高0.5-0.7cmである。そのほか海貝を模倣したものとして、銅丁字形器（図版5-4e）と銅七（図版5-4f）がある。これらは青銅で寶貝を模倣した最も早い例ではなかろうか。ここで横道に少しそれるが青銅で寶貝を模倣した資料について考えておきたい。

これまで出土している銅貝は1953年安陽大司空村³⁷M14から1枚、M312から2枚ある。1969-1977調査の殷墟西区³⁸M620（殷墟文化Ⅳ期）から2枚（図版10-1、3a、3b）出土している。これはマクラガイと共存していた。これらはいずれもキイロダカラガイを模倣した物である可能性が強い。これらに類似するのが四川省広漢県三星堆祭祀坑から出土した銅貝³⁹（図版10-6）である。三星堆祭祀坑の年代については先に触れたように、商代と西周代に意見がわかれている。形から見てこの銅貝は商代のものであってもおかしくはない。婦好墓の銅丁字形器と銅七の先端に作られた海貝は、丸味を帯びておりハナビラダカラガイを模倣した物かも知れない。これに類似しているのが、1971年山西省保徳林遮峪の一基の商墓⁴⁰から銅貝109枚（図版10-5）と海貝113枚が出土しているが、その銅貝である。保徳林遮峪の墓は正式に発掘されたものではないため銅貝も海貝もその出土状況は不明である。林巳奈夫によれば共伴している銅鼎と銅甗は殷後期1期、提梁占は殷後期2期に比定⁴¹されている。婦好墓とおそらく時期的にあまり差のない頃の墓と考える。婦好墓は殷墟文化Ⅱ期で保徳林遮峪の墓も同時期としえよう。殷墟文化Ⅱ期にはじまった青銅で貝を模倣するという風習は、保徳の例を除けばあまり活発ではなかったようだ。

婦好墓から出土したヤクシマダカラガイ1個（図版5-4a）は、墓口からの深さ5.6mの第6層に木匣に入っていたと思える大量の骨筭と象牙の器皿の南から発見された（図版5-3）。遺物は上下二層にわかれ上層からは玉盤、銅内玉援戈、石豆各1、豆の北側に石鳥4、骨刻刀2、ヤクシマダカラガイ1、陶埴2、銅丁字形器1、銅鏡1などがあつた。この状況をみるとヤクシマダカラガイは婦好の愛玩した装身具の一つであつた可能性が高い。あるいは多数出土している骨筭と関連ずけて頭飾とすることも可能と思える。

キイロダカラガイやハナビラダカラガイ＝環紋貨貝〔*Monetaria (ornamentaria) annulus* (Linnaeus)〕と異なりヤクシマダカラガイは殻高も大きく大貝と呼ぶにふさわしい。後に説明するが殷墟西区の947基の殷墓の発掘結果によると殷墟文化Ⅲ期から大貝1、殷墟文化Ⅳ期からは大貝7、銅貝2と数えるほどしか大貝は出土していない。Ⅲ期では188基の墓のうち1基だけ、Ⅳ期では434基のうち5基だけという少なさで、貴重さが知られる。

めったに手に入るものではなかった。殷墟文化Ⅱ期の婦好墓から1個とはいえヤクシマダカラガイが出土したのは、被葬者の身分という観点からも注目に値しよう。

ヤクシマダカラガイも大貝に相当すると思えるが、より相応しいのは小屯乙七基址のM149⁴²から出土しているホシダカラガイ＝虎斑寶貝〔*Cypraea tigris*(Linnaeus)〕(図版7-4b)であろう。北具人骨頭上の出土状況(図版7-4a)－多量の銅筭と玉蛙1、寶貝1から判断して頭飾とする。殻高は8.5cm、身高は4.7cm、重さ106.2gある。前端に一孔をあける。M149は乙七基址の基壇上面から掘込まれた墓で、東西方向に長軸をむける。ともに東にむけた北・南2具の人骨があり南具の人骨の両大腿の間には寶貝(キイロダカラガイの類か)が1個腹側を上むけて出土している。

頭髮の飾りに大貝を飾ることは、小屯中組墓葬の西端M164⁴³の馬が額中央にイタヤガイ〔*Pecten albicans*(schroter)〕と思える貝(図版7-3b)を飾り、それをとめた額帯に二列に寶貝を綴じつけた状況(図版7-3a.c)とか、同じく小屯のM20号(図版7-1a.b)やM40号(図版7-2a.b)の大量の寶貝を用いた馬面飾⁴⁴に繋がる。さらに西周代陝西省長安県張家坡⁴⁵出土の寶貝で作った馬肋の類を想起させる。時代が降っては、J.G.Anderssonが、甘肅省の調査旅行中、屋食に立ち寄った食堂で子供が頭髮に寶貝を結びつけているのを見つけ驚喜し、譲ってくれるように頼んだが、母親から護符だから駄目だと断られる話⁴⁶があるが、同じ役割、護符(amulet)といえる。

文献では例えば『商書・顧命』には大貝とある。殷代金文と考えられているもので大貝という言葉が出てくるのは、『博古図録』にはじめて載せられた豊鼎がある。赤塚忠の読み⁴⁷によれば「癸亥、王逯(過)卅乍册殷新宗。王商乍册豊貝。太子易東大貝。用乍父己寶鼎」となる。東(どこか場所不明)の大貝という言い方だという。器はなく、銘は『博古図録』の模写だけという器の真偽を判定しがたいものであるが、赤塚は帝乙・帝辛時期のものと逯という用辞、卅という字体からいえるというがどうであろうか。後考を待ちたい。

なお婦好墓からは紅螺〔*Rapana thomasiara crosse*〕2件が出土している。中国沿海一帯最北は遼寧石城島、最南は広東南澳、汕尾一帯に分布するとのことである。これと同じ類と思えるものが、小屯丙区墓葬M331⁴⁸から4個出土している。『周礼・春官・鬯人』には「凡山川四方用蜃、即祭四方用之」とあるが、螺は蚌蜃とも称す。M331では棺槨の最上層に最後に投げ込まれたものと思われる。死者に災いのないよう四方を祭ったものであろう。

M331の墓の中心からは海貝がオリーブの実のように南北長16cm、東西幅10cmの範囲に広がりその南端には42件の小玉群が、北端には5件の剣形小石器がある（図版5-2）。海貝は大部分は腐っているが約30枚くらいある。貝群Ⅱは腰坑の西北隅、剣形小石器2件の西南で骨筭1件の東にある。貝群の分布は棗核形で長20cm、幅10cmで貝は約40枚。すべて腐朽が激しいが2件の剣形小石器と関連がある可能性があると言報告者は言う。丙区墓葬M331の剣形小石器というのは大圭⁴⁹である。大圭が海貝を伴う例としては西周以後の資料だが、河南省洛陽中州路⁵⁰M123、M211で見られる。M123の場合は、海貝1枚を含む玉が大圭を入れた袋の外につけられた飾り—縑藉と後の時代に呼ばれた⁵¹—としての役割を果たした。丙区墓葬M331の2つの貝群も大圭を入れる袋の外飾りと思える。いずれの場合も、海貝は護符的な役割を意図したものであろう。M331は林巳奈夫編年⁵²では殷中期の青銅器を含むが、殷後期Ⅱ期のもも同出しており、墓の年代としては婦好墓と同じ殷墟文化Ⅱ期としえよう。海螺の共通する使用法があった事を窺わせて興味深い。

婦好墓は水がわき、棺槨は水面下に没していて、槨頂より下の副葬品の出土状況は大・中型の青銅彝器のおおよその位置がわかるくらいである。棺内からは玉器と海貝が主な出土品だという。6800余枚の寶貝の出土状況は正確にはわからない。北京大学が調査した山西省曲沃晋国西周前期のM6214⁵³からは、被葬者の下半身を覆うような形で寶貝が発見されている。あのような状況と同じようなものであったのだろうか。海貝は綴って『尚書・禹貢』にいう織貝のようにしたものか、『毛詩・節巷伯』にいう貝錦のようにしたものか、婦好の遺骸の上を覆っていたものではなかったらうか。

婦好は武丁の統治期に活躍し、その晩期に亡くなったとされている。甲骨文で見る限り軍団の長として戦争にも出陣している。婦好が征伐に出かけた四方には、夷方、土方、羌方、欠人などが知られる。婦好墓から出土した玉戈は廬方からの貢納品であった。‘亞弔’や‘亞其’の青銅器群も方国あるいは異族の貢納品であった可能性が指摘されている。殷墟文化Ⅱ期という早い段階での大貝を含む多量の寶貝の入手先は、方国の征伐、特に夷方などの征伐によって入手した可能性もあろう。夷方の地を特定出来ないが、ヤクシマダカラガイの分布が参考にならないだろうか。LorenzとHubertによると*Mauritia arabica*には、大別して4種類⁵⁴あり、婦好墓出土のものはそのうちの*Mauritia arabica asiatica*という種類に属するのではないかと思われる。彼らの作成した分布図によると現生種のことであるが、中国大陸沿海を北上し山東半島のつけねに達し、朝鮮半島の南端に至っている。婦好墓の報告書では、これまで中国での最北分布が福建省廈門東山と記載されているが、

arabica asiaticaだとするとそれよりもずっと北上して淮水よりも北に分布していたことになる。婦好墓や殷墟西区で発見されたヤクシマダカラガイは、淮水流域に根拠地を置く
と推定される夷（人）方征伐によって入手された可能性も考えておいて良いのではな
かろうか。

殷墟文化Ⅲ期

この時期に比定されている大墓M1004、M1002、M1500、M1217は幸い発掘報告が出版
されている。

a. 侯家荘M1004大墓⁵⁵

M1004の上面より発見された墓葬以後の墓としてM2258の嬰兒用の罐葬中、窄孔蚌片1、
貝1が出土している。小屯文化期の平民の埋葬だと報告者はいう。これまで調査された罐
葬で貝を伴うのはこの1例だけだ。

M1004の盗掘は徹底的で、盗掘坑の埋土から出土したものは、極端な場合M1004大墓の
副葬品で無い可能性も多分にあるという。胡福林の記録する墓壙内早期大盗掘坑出土物重
要者之品名、深度、数量によると深度の深くなるほど数を増しながら貝は406枚、螺1個
が出土している。鯨の背骨や石化した象の臼歯も含まれている。

注目すべきは南墓道の北段で発見された戈・矛の群の下の夯土中から発見された銅盃中
にある。銅盃は埋葬時たたきこわされ、発掘時にも損傷を受けて出土後完全な物は一つも
なかった。出土時9箱の木箱に入れてあった銅盃のうち2箱を日中戦争時、南京の陥落に
際して失い現在まで行方不明という。7箱の銅盃のタイプは全て同一であるが、外面（内
面は無文）の飾紋で五種に分けられている。そして盃上に銘文あるいは符号のつけられた
物が16種47個あった。その中に陰文で貯とある物が2個（図版6-1 b.c）あった。いず
れも外面両側の底に近い処に鑄出されたものである（図版6-1 a）。盃のタイプは第5
種の楕円眼紋が盤の両側のやや前、上にむいた処についたものである。盃は貯で寶貝を貯
えたところから由来したものであろう。白川静は『字統』の中で「卜文に宁の下に貝をし
るすものがあり、宁は貝を取める器である。……………」という。矢を取めている場合もあ
る。白川氏の説明では触れられていないが、銅盃に鑄出されているという事は、その図象
記号もつ集団が軍団を構成していたことを示すものではなかろうか。『小屯南地甲骨』に
は「癸丑貞多貯其征又ト戔于父丁牢又一牛」とか「壬申貞多貯以鬯弄于囿卯重牛」「丁亥
貞多貯以鬯于兹用」「丁丑貞多貯以鬯又伊」といったものが出てくる。島邦男『殷墟卜辞
綜類』には尙の項には「甲午卜争貞貯其出禍」「貞貯亡禍」「令貯従侯告」「貞乎双貯師」

また冒の項には「師貯其乎取筮」とか「乙未卜頃貞師貯入恣溪其邇不森兪」の卜辞の存在が知られる。多貯とか貯あるいは貯師というものがいた。争は甲骨第1期武丁期の貞人、頃は第3期廩辛期の貞人である。

銅盃だけでなく貯の図象記号をもつものに銅戈がある。河南省羅山県天湖〔河南省信陽地区文管会・羅山県文化館「羅山天湖商周墓地」(『考古学報』1986-2)〕のM11とM15である。ともに殷墟文化第Ⅱ期—婦好墓より少し遅い、武丁以後の祖庚・祖甲時代と報告者はいう。M15が小型土壌墓であるほかは、M28・M11・M12・M8といずれも中型木槨墓である。墓道はないが奴隸殉葬の痕跡は明らかであるという。M11からは貯銘を内にもつ銅戈(図版6-2 a.b)が出土した。同出の青銅彝器群は息の銘をもっているものが多数を占めている。M15はM11のすぐ東側にある。約1mの距離で面積は2・4平方メートルの小型土壌墓であった。女性墓である可能性が大で、M11の被葬者の侍妾あるいは寵姫の類の外族の女子ではないかという。その墓からは貯銘をもつ銅爵と玉蟬を含む遺物が出土した。商代の墓いずれからも貝の出土は一点も無い。

商代息族の女子は武丁の後妃となっている。息族は商王朝の異姓方国で商王と通婚していた。『詩経・商頌』に「捷彼殷武、奮伐荆楚、深入其阻、哀荆之旅」とあるように武丁時代かって武威を震い、大群の軍隊を南方荆楚の征伐に送り、深く腹地に入って敵の主力を打ちのめした。羅山嶧張天湖商代息族墓地から出土した大群の銅兵器、特に兵権を象徴する2件の銅鉞は、この墓の早期の主人と武丁の荆楚征伐の戦争とは関係があったと説明されている(李伯謙・郑杰祥「后李商代墓葬族属试析」『中原文物』1981-4)。武丁が荆楚を伐つて後に、南方との障屏が羅山一帯に設けられた可能性は大きい。大別山13個の関口、冥阨3関は南北の要道で、北は淮河に臨み守るに易く攻めるに難い。武丁より商王朝滅亡にいたる200余年、息族軍事奴隸主は商王朝の南大門を守衛してきたといえると報告者は言う。西周代は姬姓の息國に属し、戦国時代は楚の領域に入った。

貯銘から話は河南と湖北の境、商族の荆楚への道の一つを扼していた羅山天湖の息族と貯族の問題へと展開してきた。ここで少しもとに帰って貯の意味するところから考えるに、寶貝との関係—もしかすれば貯族の由来するところは早くは林編年の殷後期Ⅱ期に出現する𠄎(子荷貝形銘鼎—林綜覽⁵⁶1—鼎58)の銘の族が寶貝の採取・運搬と関係があったように、寶貝の貯蔵・管理だけでなく、東方にもと出自をもち寶貝の捕獲と何らかの関係は無かったのだろうかと言うことである。羅山からは滎水の流れに沿って湖北孝感にいっき、商代中期二里岡期の夯築で築かれた宮殿跡や城壁をもつ黄坡盤龍城へは東へ約40kmぐ

らの近い距離である。盤龍城⁵⁷では二里岡期や二里岡上層期の墓が数基発掘されており、特に李家嘴M2からは主人と殉葬者3-4人、腰坑に狗(?)、銅鉞2を含む青銅彝器・青銅武器・青銅工具の類、玉器・陶器・木彫印痕、緑松石など多数の副葬品を含む。しかしどの墓からも貝の出土は知られていない。

盤龍城は、では商人の植民地、荆楚のまっただ中に楔のように打ちこまれた植民地（鄭州の縮小コピー）〔浅原達郎「蜀兵探原」-二里岡インパクトと周・蜀・楚『古史春秋』第2号、1985年〕なのであろうか。そこに貝の副葬が見うけられないというのは、中原ほどには貝の愛好に対する風習が定着していないということなのか。盤龍城を拠点として二里岡上層期文化は、湖北江陵張家山、湖南石門皂市にも見受けられる。（「湖南石門皂市商代遺存」『考古学報』1992-2）。石門皂市では銅塊・銅渣・銅鏃石範・炉壁・熔銅炉・倣銅陶器が発見されている。二里岡期の商人が直接この地へ入りこみ、銅鑛の採掘、精錬さらには簡単な銅器の鑄造を行った。

近年では江西新干⁵⁸の大量の青銅器を出土した墓が発見されている。新干の青銅器については、二里岡期相当というところが穏当な見解らしい。正式の報告はまだほとんどなく墓の中に貝があったかどうか不明である。先の石門皂市の報告中でも貝は無かった。

貯の図象記号を持つ青銅器には、銅盃、銅戈のほかに湖南省長沙市から出土した銅鉞がある。この鉞は林巳奈夫によって彼の殷後期Ⅲ期に比定されている（綜覧1-鉞10）。『金文編』には他に鉞銘と爵銘がとりあげられているが、鉞銘は長沙のものとは字形を異にするから別のものと思える。盃も戈も鉞も軍隊の必需品で、貯師の南征と関係が深いものである。荆楚の商人からいえば異域の奥深く、楔を打ち込むように商人の植民都市が築かれていた。安陽→鄭州→信陽→武漢→岳陽→長沙は現在も広州まで達する南北のメインルートである。香港南Y島大湾で牙璋が出土⁵⁹している。これを商代に比定出来る墓からの出土としうるかどうかは問題であるが、このルートの延長上にあることは疑いない。安陽と信陽に近い羅山天湖と長沙に貯氏の図象記号を持つ青銅武器・武具の類の出土していることは、商人が軍隊をまず荆楚の地に送り込み、各水系の要衝、武漢の近くの湖北盤龍城とか江西清江呉城⁶⁰といった拠点を造っていった事を裏づけているといえよう。湖南石門皂市や湖北盤龍城、江西呉城では青銅器の鑄造が行われたり、銅鉞の採掘のおこなわれていた資料が明らかにされている。商人は自己の祭祀行為を実現するために、それはまた政治的支配の実現のためでもあったのだが、最も必要とされた銅鉞の入手を早くから心がけていたとおもえる。商代中期・後期の段階における安陽から長沙にかけてのルートの

開発、維持には銅原料の入手という重要な役目のあったことが理解できよう。

問題は羅山天湖でも盤龍城でも長沙でも（江西呉城や新干の情報は不明であるが）寶貝の出土は知られていないが、貝を貯えるという意味を本来持っている貯氏の青銅器の出土を、南方ルウトの開拓に伴ってだと位置づけるだけでなく、このルウトを伝わって逆に貯氏によって中原へ寶貝が運搬されていた証拠として良いかどうかの点である。例えば陝西省寶鷄強國墓地の報告書⁶¹によれば、竹園溝M4の強季の墓から「彝父乙」銘壺が出土し、同時に海貝1組（33枚）を伴っている。彝の銘は先にも触れたように林の殷後期Ⅱ期からあらわれ西周Ⅱ期までつづく。この図象記号をもつ氏族の本来的性格は、寶貝の入手・運搬にあったとすれば竹園溝M4のような寶貝を伴う在り方が自然であろう。貯氏の青銅器と寶貝の伴ったのは安陽殷墟M1004号大墓だけで、それ以外の南方ルウト上の地域からは出土していないという事は、当時貴重視された寶貝の商王朝への独占的な集約を意味していると考えられる。少なくとも二里岡期から商後期にかけて湖北・湖南・江西の地では貝の愛好の風習は認められない。商人が貝を入手したルートと、これらの地方は関係が無い。中原からの商人の南方開拓ルウトは、商代には長沙付近が最南端でさらにそれより南には延びて居らず、あるいはもし仮に更に南へ延びていたとしても南嶺を越えることはなく、南海産の海貝はこのルウトを使って中原に運び込まれたものでは無いと考えた方が良いと思う。資料の公表と増加を待ちたい。これらの地方が中原の貝愛好に触発されて新しい文化を生み出すのは、例えば湖北省宜昌当陽曹家崗5号楚墓など春秋晩期墓（骨貝1179枚、20%の貝平面上に翡翠色をしたガラス質物質が残っている）などが私の調べた限りでは初現である。同出の「王孫鬻」銘の甬の作器者は、名高い申包胥ではないかと推定されている（湖北省宜昌地区博物館「当陽曹家崗5号楚墓」『考古学報』1988-4）。紀元前510-501年頃の作器だという。それ以前にこの地方で貝の愛好の風習のあったことをまだ知らない。戦国時代になると明らかに海貝から骨貝などに転化したものを模倣したと思える蟻鼻銭が、楚の通貨として大量に製作された。この突然の海貝に対する愛好の変身は何が原因なのだろうか。機会を改めて検討する。

少し話を急ぎすぎた。商代の話、とくに貯の氏族集団に話をもどそう。彼等は商王から禍をなす原因を占われる集団であり、また多貯、貯師といった商の構成員の一翼を担う集団でもあった。Ⅲ期の貞人中に卣というのがあるが、彼等と関係があったかどうかはよくわからない。いずれにしろ彼等の氏族の由来は、貝の貯蔵・管理であり、さらに遡れば貝そのものを何らかの手段で取るという意味さえ持っていたかも知れない。先に指摘したよ

うに貯氏の銘をもつ青銅器と貝の共伴は殷墟以外ではなかった。南方への軍事組織として進駐したときにはすでに貯という氏族のシンボルマークを持っていたという事は、その由来がもっと古く遡るものであることを示している。なお貯氏よりももっと貝を取る事に関係があったかも知れない‘子荷貝’形の図象記号をもつもので商代に属し出土場所が明らかなものとして陝西省武功県淳沱村⁶²出土の林編年殷後期ⅢB⁶³の簋がある。他にもこの図象記号をもつ商器は殷後期Ⅱ期の鼎、殷後期Ⅲ期の觶⁶⁴があるが、いずれも出土場所がわからない。西周Ⅱ期までこの図象記号は存在するが、西周ⅠAの陝西省宝鷄桑園堡出土の簋（『文物』1959-11）、陝西省宝鷄竹園溝M4の西周ⅠBの壺いがい出土場所は不明である。出土位置の明確なものはいずれも陝西省の出土で、彼等の図象記号の元になった一彼等の本来居住していた地域とはかけ離れていると思う。‘貯’や‘子荷貝’形の銅器の出土場所から彼等が本来居住していた地方を推定出来ないとなるとどういふ手段が残っているだろうか。

甲骨文には‘貝を取る’と言う言葉がある。董作賓の「安陽侯家莊出土之甲骨文字」（『田野考古報告』第一冊、1936）の‘取貝’の項によると、彼の甲骨文字の編年の1・3・5期の卜字に見られる。しかしこれも蓄えてある貝をその場所からとるのか、どこから取るのかはわからない。殷代金文中には、夔の貝を与えるといった表現が時に見受けられる。しかし金文中の地名を正確に現在の場所に比定する事は大変難しい。例えば夔は貝塚茂樹によって山東省梁山に比定されている（貝塚茂樹『中国古代史学の発展』1946年）。また丁山「殷商氏族方国志」（『甲骨文所見氏族及其制度』1988年）は貯を杼の本字と読み『漢書・地理志』の梁国の杼秋県、現在の河南省碭山県に近いところをその氏族の居所と比定しているがどうであろうか。

b. 侯家莊M1002大墓⁶⁵

徹底的に盗掘されている。墓内出土の器物として蚌製品および貝とあり、完整および残欠者約295件とあるが貝についての説明、写真など一切無い。

c. 侯家莊M1500大墓⁶⁶

西墓道内から、鋸齒紋で飾られた横木2番目の東に、貝形の蚌殻片を象嵌した三角紋をもつ楨2件がある。みな本体は木質の材である。M1217大墓にも同様な器物が出土している。墓内出土品として、貝は完整あるいは残欠者共に147件（西墓道内の木器跡上の採集品を含む）、蚌貝（図版5-5 a.b）は蚌殻を用いて貝形を作ったものであり、真貝の象嵌品は本墓出土のものは現存2件、みな西墓道内の木器遺跡上で発見されたとある。真貝の

図・写真はない。

d. 侯家莊M1217大墓⁶⁷

西墓道内から石磬1件、双面皮鼓1件とそれらを吊り下げる石蚌を象嵌した木製の架子(M1001大墓にも同類の架梁の遺痕が三ヶ所発見されている)が出土した(図版6-4 a.b)。象嵌用の蚌[石]片と蚌貝(蚌製で貝形片)を伴っている。なお西北崗出土器物登記簿には貝123件、蚌製貝1016件(鼓と木架子の両方に象嵌)とある。

e. 山東省益都蘇阜屯M1⁶⁸

殷墟いがいでは唯一といってもいい大墓が蘇阜屯M1である。海貝3990枚という大量の貝が出土した。殷墟いがいでは知られていない。山東ではこの墓いがいでも海貝の出土が極めて多い。安陽いがい同時代の中国の他の地域には認められない特色である。M1の近くの小型墓M7⁶⁹からも寶貝の出土が知られる。形から見てキイロダカラガイか一部にハナビラダカラガイをまじえるものだ(口絵3下)。胡秉華氏の教示によれば氏の調査している山東省滕県大前掌の商代の墓葬群からは、殷墟文化Ⅲ期とⅣ期に属する墓から中型墓・小型墓を問わず大量の海貝が発見されているという事である。氏によれば山東省内では他に陽信でも出土しているとの事であった。他に益都に近い広饒⁷⁰でも出土している。なぜ山東に限ってこんなに海貝の出土が多いのだろうか。南海産の海貝の入手ルートに山東に勢力を保っていた東夷の力が関係していたことを明確に示すものと私は考える。それはまた婦好墓のヤクシマダカラガイのところで論じたヤクシマダカラガイのアジア種の分布とも関係の深いものである。山東大汶口文化や山東龍山文化に認められる含玉の風習やマクラガイの副葬は、文化の底流となって商代文化にもちこまれ、商代後期、安陽に都した商王朝の王や貴族達のうちに寶貝の愛好の風習が爆発的に盛んになった時、山東に蟠踞する東夷たちは沿海地帯からの寶貝の入手を一手に引き受けた。その結果が山東における他の地域には同時代に見受けられない海貝の大量出土と考える。

殷墟文化Ⅳ期

侯家莊M1003大墓⁷¹(楊錫璋の論文では殷墟文化Ⅳ期となっているが、高去尋等『侯家莊第七本1500号大墓』頁40には、「1003墓実早於1500墓」とある。)

西北崗出土器物登記簿によると墓内出土の器物として鯨魚骨20件、貝122枚、亀版片5674片とある。台北の歴史語言研究所に現存するM1003墓翻葬坑中出土のいわゆる‘子安貝’の貝殻は4枚で、1枚はすでに残欠、わずかに半分ほどを残している。3枚は完形で、天然の貝殻であり、わずかに背上の前部に各一穿孔を有する。…これら貝の種属の問題は専

家の鑿訂を待つとある。図版伍零の写真から判断すると8・9は貨貝（キイロダカラガイ）、10はアラ伯綬貝（ヤクシマダカラガイ）、7は環紋貨貝（ハナビラダカラガイ）か似棗貝（ナツメダカラガイモドキ）の可能性が高い。

王陵に比定されている侯家荘の大墓群や武丁の妻—王後の墓に比定されている婦好墓や山東蘇阜屯の大墓に準じる墓からの寶貝の出土状況と種類・数や問題点はさしあたって以上である。

4

つぎに殷墟（図版4-1）における中・少奴隸地主や一般庶民の集団墓に見られる寶貝の副葬状況を時期別を考慮しながら検討しておこう。

1953年安陽大司空村⁷²では165基の殷墓を発掘しそのうち83基の墓から234枚の貝を得た。それらの出土位置は大部分が人架の口中、手中、脚下の3ヶ所からで他の所からは非常に少ない。83基の墓のうち10基が盗掘されて出土状況が不明のほかは、人架の口中に貝のあるもの49基、手の内にあるもの16基、脚下に貝のあるもの11基、胸部に貝のあるもの3基、二層台上に置くもの1基（M269）である。このうち人架の口・手・脚3ヶ所にあるものはただ1基、口・手の2ヶ所は9基、口・脚の2ヶ所は6基、口・脚・胸3ヶ所は1基、胸・脚および脚下と二層台上に置くのは各1基である。口内だけあるもの32基、手の内にあるもの8基、脚下にあるのはただ1基、腰坑内にあるのは12基である。貝の腰坑内での位置は、大部分は手に近いところから出土している。木棺が腐朽後に落下した可能性がある。各墓から出土した貝の数は一定せず、最多のものは20枚（M29）、9・11・12・14・16・18・19枚のものは各1基、5枚のもの6基、その他はすべて1-4枚で1枚だけというのが最も多い。貝は天然のもので、背上の一端に孔一をあけている。図版からみてキイロダカラガイが中心と思える。遺跡の灰坑4からも海貝4枚が出土している。背面の前端より一孔をあけている。長5.7、幅3.3cmと長2.7、幅2cmのものが出土している。写真からみてヤクシマダカラガイであろう。

銅器の出土している墓は165基中48基。銅貝はM14とM312の2基から出土。M14の青銅器はこの貝だけだが、M312からは銅執鐘3を含む銅器出土墓中最多の27件の青銅製品を副葬していた。貝はさきにも触れたようにキイロダカラガイを模倣したものと思える。海貝の出土した墓の副葬品の組み合わせや時期別の判断が明らかでない。

口中に含ませたのは、貝いがいにセミ形玉器4件のうち2件がある。魚形の9件のうち1件

や玉製管玉、玉珠、有孔玉片なども口中にふくまれていた。被葬者は銅器・玉器を副葬し腰坑をそなえ、二層台上に殉葬者のいることから宗族墓と思える。ただこの調査の段階ではまだ時期や階層を十分に分析できる状況ではなかった。伊藤道治は大司空村墓における寶貝の副葬を特殊な集団だからというようにとらえたが、それは小屯の他の地域が十分に調査される以前だからだった。

中国社会科学院考古研究所『殷墟発掘報告』1958-1961によれば、小屯西地・苗圃北地(図版9-2)・張家坟・梅園庄・王裕口西・白家坟西(図版9-1)・白家坟東北・孝民屯・北辛庄・後崗・大司空村(図版9-3)・武官北地で殷代の長方形竪穴墓が302基発掘され、そのうち貝をもつ墓は80基(殷墟文化Ⅱ期では苗圃北地で7基、9枚、白家坟西A区で1基、2枚、大司空村第2区で1基、貝4枚。殷墟文化Ⅲ期では、小屯西地で3基、8枚、苗圃北地6基、8枚、白家坟西10基、20枚、孝民屯1基、1枚、後崗では1基から貝約数百枚とあるが、報告中には貝603枚、分別出自83座墓中とある。このうちに後崗のデータが含まれていると思える。大司空村7基、17枚。殷墟文化Ⅳ期では小屯西地3基、23枚、苗圃北地2基、3枚、梅園庄1基、1枚、王裕口西1基、2枚、白家坟7基426枚、北辛庄1基、2枚、大司空村3基、11枚。時期不明のものは、25基、59枚となる。)後崗M1号墓の貝約数百枚というのが正しいとすると、白家坟西B区M49号墓の貝385枚というのと合計が合わない。報告には次のようにある。

貝 603枚 83基の墓から出土。貝1枚のもの43基。貝2枚のもの19基。貝3枚・貝4枚のもの各5基。さらに貝5枚および貝10枚のもの各2基。貝6枚・貝7枚・貝11枚・貝14枚・貝15枚・貝18枚から貝385枚のものは各1基。その出土位置は貝1枚のものは、多くは人架の口中に含み、少数は手中(左手あるいは右手)に握っている、極く少数は足端あるいは身上に置く、個別には腰坑中あるいは犬架の頸部にある場合も見受けられる。貝2枚の場合は、多くは口中に含む、またわけて口中と手中にある場合があり、少数は口中と足端にあり、個別には腹部あるいは両手に握らせている。各事例がこの報告書では詳しく記載されている。貝15枚・貝18枚出土の場合はいずれも全て口中に含まれていた。

上述の貝は全て海貝で貨貝(図版8-5 b.c.d)、アラ伯綬貝(図版8-5 a)と寶貝の幼体の三類である。貨貝の大小にはちがいがあり、その背頂が淡黄色で圓圈状を呈するもの(環紋貨貝のことであろう)と大部分が白色をていするもの(形から見て貨貝)とがある。その背部の正中あるいは一端にみな一孔を有する;綬貝はわずかに3枚あり、白家坟西B区M42(殷墟文化Ⅳ期)から出土している。背部にはいずれも一孔ある;寶貝の幼体

は白家坟西B区M49（殷墟文化IV期）の一墓中から、計285枚（附表四八では貝385となっている）出土した。貨貝に比べて小さく瓜螺状を呈し、殻口は比較的大きく、唇部は極めて薄い。殻は淡白色を呈し大部分の背部に一孔をあける、少数は背腹頂に各一孔をあけている。ただ図版七〇を見ると、アラ伯綬貝と貨貝と環紋貨貝は区別がつくが、伶鼬榧螺（マクラガイ）（図版8-5g）が認められる。また拟棗貝（ナツメダカラガイモドキ）かと思えるもの（図版8-5f）もあるが写真では判定しがたい。螺塔の低いもの（図版8-5e）もあるからそれが寶貝の幼体であろうか。寶貝の成貝だけでは足りず幼体までも運んだという貴重な事例である。

1969-1977年殷墟西区墓葬発掘報告⁷³によると、白家坟、梅園庄、北辛庄、孝民屯の間の約三十万平方メートルを調査し939座の殷墓（図版9-4・5・6・7・8）と5座の車馬坑を発掘した。8区の墓区にわかれる。各墓区毎のデータは省略して時期別の合計と特色だけ述べる。

時 期	貝を副葬する墓数	貝の数	貝の無い墓	計(貝の数)
I 期	0	0	5	5(0)
II 期	18	32	56	74(32)
III 期	67	114+大貝1	121	188(114+大貝1)
IV 期	193	1946+大貝7+銅貝2	241	434(1946+大貝7+銅貝2)
不 明	61	352	190	251(352)
合 計	339	2444+大貝8+銅貝2	613	952(2444+大貝8+銅貝2)

三分の一の墓が盗掘されているということであるから、上記のデータも殷代当時の正確なものでは無い。しかし傾向は十分に窺えよう。当時の墓区と墓区の間には墓の作られていない境界線が存在した。銘文のある銅器の出土状況から見れば、氏族ごとに独自の墓域を形成していたことが窺える。被葬者の階層は殉葬者だけでなく車馬坑までもなう極く少数のもの、殉葬者を伴い青銅彝器や武器をもつもの、殉葬者をともなわず青銅彝器や武器をもつもの、陶器と青銅武器をもつもの、陶器だけ副葬するものと5階層に大別出来る。貝はいずれの階層にも共通して伴っており、特にどの階層に集中しているということはない。

しかし上記の表に明らかなようにII期→IV期と、時期が遅くなるほど貝の数量は飛躍的に増加している事がわかる。アラ伯綬貝（図版10-2a）や虎斑寶貝（ホシダカラガイ）

(図版10-4b)等の大貝も増え、貨貝を模倣した銅貝(図版10-1・3 a.b)もⅣ期には出現している。また伶鼬榧螺(マクラガイ)(図版10-2 c.d.e)も写真図版に認められる。貝の飛躍的な増加の裏にはこれら伶鼬榧螺や寶貝の幼体の搬入があったことにも原因があると思える。しかし950基の墓の三割五分しか貝をもたないのに比べて、Ⅱ期の婦好墓だけで6800余枚の貝をもっている。当時貴重な南海産の寶貝が権力の中核にいかによく集中していたか、この一事をもってしても理解できよう。商代に貝が貨幣として使用されていたという考えは、このことから疑問とされると私は思う。

問題は後崗の圓坑⁷⁴(図版8-1 a.b.c.d)から出土した寶貝をどんなふう解釈するかである。圓坑は安陽市の西北の高樓庄村の北約105mの後崗の南斜面上に位置している。1933年調査された大墓から東南へ約300mのところだ。上・中・下三層の死者群(25+29+19=)73人のうち貝を伴う人骨(5+3+2=)10人、貝は上層で556+ α 枚、中層から77枚、下層から60+ α 枚出土し合計は693+ α 枚となる。先の1958-61年の殷虚発掘報告では78基の墓から貝207枚が出土した。一圓坑中の貝の数が80基の墓葬の副葬数の数倍に達するというのはどう考えても異常である。少しくどいかも知れぬがどんな状況で貝を伴っていたか抜き書きしておきたい。

a. 第1層人架(24人中貝を伴うもの5人)

3号 40歳以内の男性、うつ伏せで両膝を胸前に引きつけ両手は頭の下にあつめる。顔を覆ってしゃがんだ状態。胸の下に貝13枚。

9号 郭沫若のいう戊嗣子(この圓坑の主人)30歳前後で性別不明 貝なし。

16号 左腕に貝一串45枚と銅鈴・銅泡各1、胸・腹の下に貝40枚と35枚。腹の下では貝は2条に分かれている。貝は一孔あり孔はみな下向きで紐を通していたと思える。頭に骨筭。

17号 18-19歳の男性 口に貝3枚を含む。頭下に貝両串、各10枚。頭に骨筭。

18号 16-17歳の男性 肘の近く貝一堆、保存の良いもの300枚。

22号 無頭、その南に貝一堆、約100余枚。

b. 第2層人架(29人中貝を伴うもの3人)

3号 青年男性 俯身屈肢 臀部に貝25枚、2条に分かれる。

27号 俯身 臀部の右側に貝三堆、20枚・10枚・5枚、これらの下にばらばらの貝16枚。

29号 児童 側身屈肢 乳歯がまだ脱落していない。左膝上に貝1枚。頸部に玉珠1。

c. 第3層人架(19人中貝を伴うもの2人)

5号 20-23歳の男性 側身屈肢 右骨盤上に貝一堆、60枚を発見。右骨盤下にも貝があったがきちんとは並んでいない。貝の上に朱砂の痕がある。

17号 25歳ぐらいの男性? 頭部に骨筭、頭の北側に海貝。

後崗の圓坑からは男性ばかりで、女性を含んでいないといぜん言われたこともあったが、報告によれば第3層から2体は確実に女性と判定された人骨が出土している。報告は圓坑中の人物達を奴隷と簡単にかたづけけるが、商代後期にしては珍しい長文の銘をもつ銅鼎(図版8-2 a.b)を伴うなど、海貝の副葬状況からみてもとても奴隷といった階層の人物群ではない。

侯家荘の王陵に近接して、恐らく武丁いご歴代つづいた先王に対する祭祀の際の羌人を含む人身犠牲が排葬坑(図3)という形で明らかにされた。10体ぐらいをひとまとめにして長方形土坑内に葬っている。彼等は副葬品を基本的に持たない。貝の出土も聞かない。それは侯家荘の大墓の墓道中に埋められた頭骨だけとか、首の無い死体に副葬品がなく貝を伴っていないのと同じである。ただ小屯の宗廟・宮殿区から発掘された奠基墓・落成墓などの内には副葬品を伴うものがある。そのなかで海貝をもっているものにはどのような例が見られるか、ここで検討しておきたい。

乙七基址北組墓葬⁷⁵では車墓5基のうちM20(図版7-1 a. b), M40(図版7-2 a. b), M204の3基で海貝の出土が知られた。この場合、海貝はM20のが写真からみてキイロダカラガイを主としているが、馬の顔の装飾具として用いられた物である。墓群の西側(車右墓)の首を伐られ数体が一つの土壇に放り込まれた状況の鹹墓の集中する地域では、27墓125人で、蚌製の額帯をもつM86, M88を除くとM123から骨筭1が出土しているだけで、他はすべて副葬品は無い。一方、墓群の東側(車左墓)の各墓はいずれも基本的に副葬品を伴っている。最も東南隅に位置するM242は全体の墓群のうちでも3基しかない銅器墓で7具の人骨のうち第2・3・4・6の人骨の口中に海貝を含んでいた。また同じ人骨のうち第1・6・7の頭上には骨筭があった。口中に貝を含んだり頭上に筭をもつことより女性かと言われているが、どうであろうか。

乙七基址中組墓葬⁷⁶80基の墓のうち副葬品の出土した墓は8基で、海貝の出土した墓はM237の10体をいれた墓から1枚だけである。海貝以外の出土品は銅鈴9個、蚌泡32個、木楯(1-5?)、骨筒1個である。

乙七基址M149⁷⁷(図版7-4 a. b)については先にのべた。基壇上からのほりこみである。

乙七基址M186⁷⁸も基壇上からのほりこみ。9具の人架のうちの1の腰の龍頭刀・虎頭刀

に各1枚海貝を伴う。

乙11基址M287⁷⁹ 貝10枚

乙20基址M414⁸⁰ (図版7-6) 基壇上からのほりこみ。人骨1と狗1。石戈1と貝群。貝は肋骨・胸部の上下に多数。身の上に佩戴のもの。孔あり、多くは砕けていたが144枚を数えた。

乙20基址M335⁸¹ (図版7-5) 基壇上からのほりこみ。跪葬墓で石戈1・貝群を伴う。右腿に二列13枚と6枚。右腿の近くに別に貝一堆があったが、身の上に佩戴していたかどうか判らない。

小屯乙七基址の北・中・南の墓葬群は、戦争に敗れて捕獲された軍団が建築物の落成に際して犠牲に供されたという考えがある。武器を伴わない墓群や児童墓や女性墓かと思われる墓もあり、軍団と結論するのは問題がある。いずれにしても貝を伴う例はあまり多くないのだ。また奴隸身分といった身首を異にする状態のものにはまず海貝の副葬はない。

圓坑の報告書では、被葬者は奠祭された奴隸だという。郭沫若は上層の9号人骨の近くから出土した戊嗣子鼎(図版8-2 a. b)から、この人骨を墓主とする考え⁸²を発表した。劉克甫は銅鼎の器形や銘文の字形、中胡二穿戈(図版8-3)の出土などを根拠としてこの坑の年代は周代とし、被葬者は帝辛(紂王)の遺児、武庚禄父だ⁸³とした。林巳奈夫は周の西伯が羑里に囚えられた時、身代わりとなって死んだ西伯の長子「伯邑考」ではないか⁸⁴という。『帝王世紀』に「囚文王、文王之長子曰伯邑考質於殷、為紂御、紂烹為羹、賜文王曰「聖人當不食其子羹」文王食之。紂曰「誰謂西伯聖者? 食其子羹尚不知也」」とあるのと結びつけて考えたのだ。

安陽圓坑と同じ雰囲気をもつ遺跡は四川省広漢県三星堆1・2号坑である。報告者は1号坑は殷墟文化I・II期、2号坑は殷墟晩期という見解⁸⁵である。徐朝龍によると三星堆遺跡(城全体と土穴)の終焉は、西周前期後半だという(最近では終末を西周中期⁸⁶と仰いでいる)。1号坑からは海貝は11号銅頭像内に主として入れられていた。2号坑からは三層にわかれて遺物は出土した。注目すべきは象牙と寶貝である。まず海貝が投げ込まれ玉石礼器、青銅樹ついで大型の青銅彝器や青銅立人、頭像、人面、最後に象牙を放り込んでいた。尊・罍・彝など青銅彝器や青銅人頭像の内・青銅獸面の傍らに海貝が入れられていた。出土遺物は安陽圓坑のものと同じように火を受け、明らかに焼けた痕を留めている。海貝の種類は3種類で、虎斑寶貝-長3c.mで出土は比較的少ない。貨貝-長1.5c.m、背面は磨かれて孔になっている。出土数はわりあい多い。環紋貨貝-出土はもっとも

多い。大部分背面は磨かれ大孔を呈する⁸⁷。最上層に投げ込まれた大量の象牙について、江玉祥は『周礼・秋官・壺琢氏』をひき象牙は水神を殺す巫術に用いられた。ひいては祭祀坑の埋葬者達が青銅人頭像やその他の神器の崇りを恐れて、これらを毀し深く埋め、象牙を用いて厭勝の儀礼を行ったのだ⁸⁸という。徐朝龍は王朝の交代に伴う先王朝の祭器の廃棄を主張している⁸⁹が興味深い観点と言えよう。

後崗の圓坑と三星堆の祭祀坑の両者に共通する雰囲気とは族滅と言うことである。後崗の1933年大墓などがもし曹定云のいうように盤庚ら殷後期の初期の王達の墓だとすると、そのすぐ近くで大規模に行われた奠祭は伯邑考たち周人を紂王が祖先神を含め帝に捧げた犠牲であった可能性は大きい。ただ周人もその時（殷墟文化IV期）すでに寶貝愛好の風習を身につけていたと言うことになる。この点については機会を改めて考えたい。

5

中国新石器時代で海貝の副葬が最も早く認められるのは、青海省の馬廠期中期である。海貝の種類は形から見てキイロダカラガイとハナビラダカラガイであろう。真貝だけでなく石製の貝も同時期に現れている。いずれにしても数は少ない。青海柳湾では馬廠期中期の墓564基中3基から海貝1、石貝3、馬廠期晩期の墓208基中3基から海貝15、石貝2、齐家期早期墓83基中1基から海貝34枚、齐家期晩期墓126基中2基から海貝2枚が出土している。馬廠期の彩陶壺の紋様には、貝からきたのではないかと思われる貝紋⁹⁰がある。J.G.AnderssonやHanna RydhらがElliot Smithのいう再生思想との関係で、この貝紋について論じた⁹¹こともあったが、その後の進展はないようだ。

陝西省の姜寨や北首嶺の仰韶文化半坡類型では口に小貝殻を含む事例もしられたが、極めてまれであり同じ地域で後の新石器時代文化につながらない。沿海地帯の大汶口文化では江蘇省崧澤の早期墓につづき、山東の晩期墓で玉製品を口に含むと言う風習が知られる。そして山東龍山文化早期につながる。大汶口文化ではノロ鹿の牙を手に握らせる風習も周知のことだ。南海産の貝であるマクラガイの副葬例も大汶口文化に1例だが知られており、高去尋のいう‘殷礼の含貝・握貝’の底流に、山東大汶口文化が関連をもっていた可能性が高いと考える。

中原における寶貝の愛好は偃師二里头Ⅲ期に始まる。青海では馬廠期中期・晩期に寶貝は確実に出土している。以後、齐家期・辛店期でも愛好された。安志敏は二里头期のほうが馬廠期よりも古いと主張し、青海からの海貝の出土はすべて中原文化の影響下に生じた

という。年代比定に問題があると考え。青海から出土する寶貝は4方向のルートからの搬入が想定されるが、中国よりも更に西方から伝わったものではないかという疑問を私はもっている。

二里头Ⅲ期いごを商代前期と仮定すると商代前期・中期の段階では、寶貝の出土は河南省を中心に分布している。中期＝郑州期には河北省台西でも認められるが、商の王畿の範囲を示すものであろう。甘肅では二里头併行期にも海貝の副葬がみられるが、馬廠期とは海貝の搬入ルートを異にしているかも知れない。二里头期の青銅器の出現は、嚴文明氏によれば齐家文化など西方からの中原文化への影響が考えられるとのこと⁹²である。海貝の贈与はその見返りだった可能性もあろう。商代前期・中期の段階での寶貝は、キイロダカラガイ・ハナビラダカラガイを中心に行っているようだ。資料が生物学的にきちんと認定されていないので、図とか写真から判断するしかない。貝の認定も正確に報告書で望みたい。石や骨製の貝も知られている。ただ貝の副葬位置は必ずしも一定したものではない。強く階層差を示すものでもないようだ。

寶貝が中原で愛好されたのは、柳田國男が想像したような貝の背面の色や光沢が中心ではなかったと思う。海貝はたいていの場合、背中に孔を開けてあるか、擦り磨いている。海貝を模倣した石貝・骨貝は腹面側の唇歯を刻んで海貝の模倣であることを示している。G.Elliot Smithが早く指摘した⁹³ように、寶貝の腹面と女性の生殖器の類似が再生の観念を想起させ、更に再生の観念が長命や辟邪や護符の意味に転化していったものと思える。寶貝を口に含む風習は二里岡上層期にあたる河北省藁城台西M103号墓が最古である。被葬者は殷代後期の貞人に相当する卜人と思える。寶貝を口に含むことが再生につながるとすれば、再生の思想は占卜者という特殊な身分の人物が発想したものであろうか。

寶貝の現生種は200種類をこえる。中国新石器時代や商代前期・中期に知られている海貝はキイロダカラガイとハナビラダカラガイが中心で、他の種類の寶貝の存在をまだ確認していない。寶貝と同じ南海産の貝であるマクラガイも早くに山東までは搬入されていた。商代後期になると、キイロダカラガイ・ハナビラダカラガイ・マクラガイのほかにホシダカラガイ・ヤクシマダカラガイなどの大貝が出土しはじめる。朱活によればハツユキダカラガイ＝黍斑眼球員〔*Erosaria miliaris* (Gmelin)〕も出土している⁹⁴とのことだが私は確認できなかった。ナツメダカラガイモドキとか寶貝の幼貝までも搬入されている。殷墟文化Ⅱ期いご青銅で模倣した銅貝も出現するが、大量に製作されたとは思えない。

商代後期になると寶貝の副葬状況からいくとうりかの使用の仕方があったことが判明す

る。大墓では多数の貝を連ねて身を覆うものを作った。上半身や下半身あるいは片身を覆っていた可能性がある。笄と共に髪飾りに用いる風は、商代貴重な動物であった馬の顔面の装飾にも用いられた。護符的役割を果たしたと思える。大圭の袋の飾りや虎頭刀・龍頭刀の柄や鞘につけられてもいた。この場合も護符的役割を果たしたのであろう。大墓の墓道から葬送儀礼に用いられた鼓面の飾りや石磬の木製簧の象嵌にも使用されていた。一方、大墓の殉葬者や宗廟・宮殿区の奠基や落成墓の殉葬者のうちや、宗族の墓の大部分では1-20枚の海貝を死者の口に含ませたり、手に握らせたり、足の先に置いたりしている。使用の仕方が多様化しており、枚数の少ない場合は含貝・握貝が基本である事が判る。

殷墟文化Ⅱ期から時期が新しくなるにつれて、首都に集中する寶貝の量は飛躍的に増加する。山東省の益都蘇阜屯など極く一部を除いて、寶貝は殷の首都安陽小屯に集中している。王や王后ら権力者の寶貝に対する執着は強く、中・小奴隸地主とか兵士・庶民達の所有量とは比較にならない圧倒的多量を持っている。入手先は殷代後期では首都いがい寶貝の出土が極端に多い益都周辺を含む山東地方が、商人が寶貝を入手するルートの有力な一部であった事はまず間違いないであろう。沿海地帯に近い山東半島の住人や淮水下流の夷(人)方をとおしてと思える。そのことはヤクシマダカラガイのアジア種の分布や、貯や子荷貝形銘青銅器の存在からも推定できそうだ。貯の銘をもつ青銅器の出土状況を見ると、殷墟から鄭州さらに信陽をへて武漢、長沙と南北のルートがあったことがわかる。商人はすくなくとも商代中期の段階から荆楚の地深く、楔を打ち込むように貯師などの軍団を送り水系に沿って植民都市を造り、彼等にとって必需品の銅原料の入手に努力をしてきた。このルートが殷代さらに南方に延びて南嶺を越えて広州や香港にまで達していたということはありえただろうか。もしあったなら中原への寶貝搬入の有力なルートであることは間違いない。現在までのところ商代に南嶺を越えて中原からのルートが延びていたという確証はない。資料の公表・発見を待ちたい。南嶺を越えて南海から直接北上して寶貝を搬入するルートが商代や西周代にはまだ開発されていなかったという事になると、南海産貝の搬入ルートは沿海地帯を北上するほかは基本的になかった。商代に琉球諸島の海貝が中原に搬入されたという確証はない。種子島の広田の遺跡⁹⁵にしても漢いご、三国頃の新しい遺物しかないのだ。最近縄文時代に鬲形土器の日本列島各地での出土⁹⁶や縄文中期の山形県の遺跡から中国新石器時代の石斧に類似するものの発見⁹⁷などが報じられているが、寶貝入手のルートを論証する材料にはほど遠い。

安陽期、商王達の墓への海貝の集中に対し一般の宗族の墓からは口に1-20枚ぐらいの

貝を口に含ませたり、手にもたせたりしているのが普通に見られる状況である。後崗の圓坑や三星堆の2号坑からの大量の海貝の出土はそういった状況のなかに置いてみると、その異常さが際だっている。小屯宗廟・宮殿区でも落成墓のうちにごく少数例、海貝を多く稀にもつ墓がある。戈を伴っていることが多く戦士と思える。大墓の腰坑内の戦士と同じ扱いを受けたものであろう。しかし後崗の圓坑や三星堆の2号坑とは、大墓の殉葬者にしても宗廟・宮殿区の殉葬者にしても海貝の副葬数を異にしていることはあきらかだ。後崗圓坑の死者達は奴隷といったような階層とは考えられない。三星堆の祭祀坑が先王朝の祭器を厭祥の意図を込めて棄て埋めたものというなら、後崗圓坑の死者達は先に功のあった宗族の恐らく族滅という性格をもったものではなかろうか。圓坑の貝を伴う例のなかにいくつか貝の堆積状態を示す記述があった。小屯乙基址群の奠基墓や落成墓中にも認められた状況である。貝織を上半身や下半身に、あるいは半身に纏った華麗な服飾が目に見えよう。それらの服飾は戦士の勲功に対する王や王后からの恩賞だった。

林巳奈夫により殷後期Ⅲ期に比定されている⁹⁸白鶴美術館所蔵の小子鬻占（図版10-7 a, b, c）の器の銘に「乙巳子令小子鬻先以夷于燠子光商鬻貝二朋子曰「貝惟蔑汝曆」鬻用乍母辛彝才十月惟子曰令望夷方罍」とあり、蓋の銘に「鬻母辛」とある。「貝もてこれ汝の曆をほむ」とは、赤塚忠は蔑を「ほむ」と読む。白川静⁹⁹によれば、蔑は「なし」と読み、また功烈を「あらわす」意となる。蔑曆は軍功を表彰する旌表の意味に用いる。「いさおしをあらわす」と読み曆は功曆をいう。殷墟の王陵の主体部以外から出土する貝は、王や王后が基本的にこの軍功もしくはそれに準じる功を表彰する際に与えたものであったと私は考える。それが貨幣の役割を果たす¹⁰⁰のは少なくとも西周中期以後の事と思える。

貝の現生種の観察・写真撮影に際し多くの方（敬称略）に協力していただいた。黒住耐二（千葉県立中央博物館）・宮本篤（下関水族館）・福田敏一（貝の博物館）・末広和信・白水完治・小谷典子・河村吉行・長谷川和美・田崎美佐・佐野正子・豆谷和之・富樫孝志・松木武彦。考古資料の蒐集・観察・写真撮影では乗安和二三・井上洋一・中村徹也・森下章司・潮見浩・梅木謙一・天羽利夫・古賀真木子・佟佩華・呉文祺・羅勳璋・嚴文明・崔大勇・馬良民・張守林　なお1995年5月21-25日河南省偃師市で行われた中国社会科学院考古研究所主催の第1回商代国際学術討論会での発表に際し、戴曉芙・栾豊実・山崎秀穂・和田敏英の協力をえた。本論文はその時発表したものの日本文原稿に加筆訂正を加えたものである。中文・日文いずれの原稿の図版・図・口絵作成も多賀まゆみによる。以上の各

氏に心からお礼を申し上げる。

貝の学名は奥谷喬司編『世界文化生物大図鑑 8 貝類』世界文化社、1991により、中国の学名の一部は鳥羽水族館の方の教示を得た。

注

- 1 近藤喬一「銅剣・銅鐸と弥生文化」『古代出雲王権は存在したか』、山陰中央新報社、1985年
- 2 伊波普猷「子安貝の琉球語を中心として」－海巴と烏セ必孫－『方言』第5巻第11号、1935年
- 3 小田富士雄「五島列島の弥生文化－総説編－」『九州考古学研究』弥生時代篇、1983年
- 4 乗安和二三『土井ヶ浜遺跡第8次発掘調査概報』1983年
- 5 FELIX LORENZ JR.& ALEX HUBERT,A GUIDE TO WORLDWIDE COWRIES, GERMANY,1993.
C.M. BURGESS,M.D., COWRIES OF THE WORLD,CAPE TOWN,1985.
- 6 山東大学崔大勇氏の協力を得た
- 7 青海省文物管理处考古队・中国社会科学院考古研究所『青海柳湾』1983年
朱活『古銭新譚』1992年によれば、柳湾M503から蚌殻と珧貝が、M345から骨貝が出土しているが、報告書にはない。
- 8 安志敏「中国西部の新石器時代」『考古学報』1987-2
- 9 朱活「古币三談」－談我国先秦货币の亀貝、珠玉、金銀－『中国銭币』創刊号、1983年
- 10 中国社会科学院考古研究所『宝鷄北首嶺』1983年
- 11 湖北省宜昌地区博物館「当陽曹家崗5号楚墓」『考古学報』1988-4
- 12 林巳奈夫「試論香港南Y島大湾出土的牙璋」『南中国及鄰近地区古文化研究』1994年
- 13 裴安平「中原商代‘牙璋’南下沿海的路線與意義」『南中国及鄰近地区古文化研究』1994年
- 14 云南省博物館『云南晋寧石寨山古墓群発掘報告』1959年
- 15 陳麗棕「略論巴蜀貨幣」『三星堆与巴蜀文化』1993年
劉世旭「略論“西南絲綢之路”出土海貝与貝币」『四川文物』1993-5

- 莫洪貴「広漢三星堆遺址海貝的研究」『四川文物』1993-5
- 16 徐朝龍「三星堆遺跡における二つの遺物埋納土穴の性格をめぐって」『茨木大学教養部紀要』第25号、1993年
- 17 童恩正「試論我国从東北至西南的辺地半月形文化伝播帯」『文物与考古論集』1986年
- 18 張玉忠「新疆考古発現的東南沿海珊瑚、海貝」『南中国及鄰近地区古文化研究』1994年
- 19 邵望平「新発現的大汶口文化」『新中国的考古発現和研究』1984年
- 20 上海市文物保管委員会『崧澤-新石器時代遺址発掘報告-』1987年
- 21 半坡博物館・陝西省考古研究所・臨潼県博物館『姜寨-新石器時代遺址発掘報告-』1988年
- 22 金関丈夫「魂の色-まが玉の起り」『発掘から推理する』1975年
- 23・24 張光直『中国青銅時代』1982年
- 25 北京大学歴史系考古教研室商周組『商周考古』1979年
- 26 中国科学院考古研究所『輝県発掘報告』1956年
- 27 河南省文物研究所・中国歴史博物館考古部『登封王城崗與陽城』1992年
- 28 河北省文物研究所『藁城台西商代遺址』1985年
- 29 郭沫若『卜辞通纂』1933年
- 30 鈴木敦「殷後期における大墓の系譜」『博古研究』第2号、1991年
- 31 鄭振香「安陽侯家莊1001号墓的年代与相関問題」『中国商文化国際學術討論会』1995年
- 32 邹衡「試論殷墟文化分期」『北京大学学報』人文科学1964-4・5
- 33 張光直『中国青銅時代』1982年
- 34 梁思永・高去尋『侯家莊』第二本、1001号大墓 上・下、1962年
- 35 梁思永・高去尋『侯家莊』第八本、1550号大墓、1976年
- 36 中国社会科学院考古研究所『殷墟婦好墓』1980年
- 37 馬得志等「一九五三年安陽大司空村発掘報告」『考古学報』第9冊-1955年
- 38 中国社会科学院考古研究所安陽工作队「1969-1977年殷墟西区墓葬発掘報告」『考古学報』1979-1
- 39 四川省文物考古研究所『中国考古文物之美3 商代蜀人秘宝 四川広漢三星堆遺跡』1994年

- 40 吳振祿「保徳県新発現的商代青銅器」『文物』1972-4
朱活『古錢新譚』1992年
- 41 林巳奈夫『殷周時代青銅器の研究』殷周青銅器綜覧一、本文・図版、1984年
- 42 石璋如『小屯』乙区基址上下的墓葬、1976年
- 43 石璋如『小屯』中組墓葬、1972年
- 44 石璋如『小屯』北組墓葬 上・下、1970年
- 45 中国科学院考古研究所『澧西発掘報告』1962年
- 46 J. GUNNAR ANDERSSON, CHILDREN OF THE YELLOW EARTH, LONDON,
1934.
- 47 赤塚忠『中国古代の宗教と文化』1977年
- 48 石璋如『小屯』丙区墓葬・上・下、1980年
- 49 林巳奈夫『中国古玉の研究』1991年
- 50 中国科学院考古研究所『洛陽中州路』1959年
- 51 林巳奈夫『中国古玉の研究』1991年
- 52 林巳奈夫『殷周時代青銅器の研究』殷周青銅器綜覧一、本文・図版、1984年
- 53 北京大学サックラー考古芸術博物館
- 54 FELIX LORENZ JR.& ALEX HUBERT,A GUIDE TO WORLDWIDE COWRIES,
GERMANY,1993.
- 55 梁思永・高去尋『侯家莊』第五本、1004号大墓、1970年
- 56 林巳奈夫『殷周時代青銅器の研究』殷周青銅器綜覧一、本文・図版、1984年
- 57 湖北省博物館「一九六三年湖北黄坡盤龍城商代遺址的発掘」『文物』1976-1
- 58 江西省文物考古研究所・江西省新干県博物館「江西新干大洋洲商墓発掘簡報」『文物』
1991-10
- 59 香港中文大学中国文化研究所『南中国及鄰近地区古文化研究』1994年
- 60 江西省博物館・清江県博物館「江西清江呉城商代遺址第四次発掘的主要収獲」『文物
資料叢刊』2-1978年
- 61 盧連成・胡智生『宝鷄強国墓地』1988年
- 62 陕西省考古研究所ほか『陕西出土商周青銅器』一、1979年
- 63・64 林巳奈夫『殷周時代青銅器の研究』殷周青銅器綜覧一、本文・図版、1984年
- 65 梁思永・高去尋『侯家莊』第三本、1002号大墓、1965年

- 66 梁思永・高去尋『侯家莊』第七本、1500号大墓、1974年
- 67 梁思永・高去尋『侯家莊』第六本、1217号大墓、1968年
- 68 山東省文物考古研究所「山東益都蘇阜屯第一号奴隸殉葬墓」『文物』1972-8
- 69 山東省文物考古研究所・青州市博物館「青州市蘇阜屯商代墓地發掘報告」『海岱考古』第一輯、1989年
- 70 山東省文物考古研究所・広饒県博物館「広饒五村遺址發掘報告」『海岱考古』第一輯、1989年
- 71 梁思永・高去尋『侯家莊』第四本、1003号大墓、1967年
- 72 馬得志等「一九五三年安陽大司空村發掘報告」『考古學報』第9冊-1955年
- 73 中国社会科学院考古研究所安陽工作队「1969-1977年殷墟西区墓葬發掘報告」『考古學報』1979-1
- 74 中国社会科学院考古研究所『殷墟發掘報告 1958-1961』1987年
- 75 石璋如『小屯』北組墓葬 上・下、1970年
- 76 石璋如『小屯』中組墓葬、1972年
- 77~81 石璋如『小屯』乙区基址上下的墓葬、1976年
- 82 郭沫若「安陽圓坑墓中鼎銘考釈」『考古學報』1960-1
- 83 劉克甫「安陽後崗圓形葬坑年代的商討」『考古』1961-9
- 84 林巳奈夫『中国殷周時代の武器』1972年
- 85 楊榮新等『四川文物』-三星堆遺址研究專輯、1989年
- 86 徐朝龍「三星堆遺跡における二つの遺物埋納土穴の性格をめぐって」『茨木大学教養部紀要』第25号、1993年
- 87 劉世旭「略論“西南絲綢之路”出土海貝与貝币」『四川文物』1993-5
- 88 江玉祥「広漢三星堆遺址出土的象牙」『三星堆与巴蜀文化』1993年
- 89 徐朝龍「三星堆遺跡における二つの遺物埋納土穴の性格をめぐって」『茨木大学教養部紀要』第25号、1993年
- 徐朝龍「中国青銅文明の中で異彩を放つ三星堆遺跡の青銅遺物群」『五浦論叢』茨木大学五浦美術文化研究所紀要1、1993年
- 90 張朋川『中国彩陶図譜』1990年
- 91 J. G. Andersson, On symbolism in the prehistoric painted ceramics of China, "BMFEA" vol.1, 1929.

Hanna Rydh, On symbolism in mortuary ceramics, "BMFEA" vol.1, 1929.

- 92 嚴文明氏との1994年10月28日北京大学での会話
- 93 J.Wilfrid Jackson, F.G.S., Shells as Evidence of the Migrations of Early Culture, Manchester, 1917. のうちG.E.SmithによるIntroductionの部分
- 94 朱活『古錢新譚』1992年
- 95 金関丈夫「種子島広田遺跡の文化」『発掘から推理する』1975年
金関 恕「小林先生の宿題」『小林先生追悼録』1994年
- 96 安志敏「記日本出土的鬲形陶器」『考古』1995-5
- 97 朝日新聞1995年8月5日西部版夕刊
- 98 林巳奈夫『殷周時代青銅器の研究』殷周青銅器総覧一、本文・図版、1984年
- 99 白川静『字統』1984年
白川静『金文通釈』第1-55輯、1983年完
- 100 王毓銓『我国古代貨幣的起源和發展』1957年・朱活『古錢新探』1984年・朱活『古錢新譚』1992年のいずれも商代の海貝を貨幣とする。

口 絵

1. 所蔵：土井ヶ浜人類学ミュージアム 写真提供：山口県埋蔵文化財センター
2. 所蔵・写真提供：京都大学文学部博物館
3. 上 所蔵・写真提供：東京国立博物館
下 所蔵・写真提供：山東省文物考古研究所

図 出 典

- 図1 遼寧省文物考古研究所『中国考古文物之美1 文明曙光期祭祀遺珍 遼寧紅山文化壇廟塚』1994.
- 図2 1～6. 中国社会科学院考古研究所『寶鷄北首嶺』1983.
7. 半坡博物館・陝西省考古研究所・臨潼県博物館『姜寨—新石器時代遺址発掘報告—』1988.
8. 上海市文物保管委員会『崧澤—新石器時代遺址発掘報告—』1987.
- 図3 Kwang-chih Chang, The Archaeology of Ancient China, 1986.

图版出典

- 图版 1 中国社会科学院考古研究所『胶县三里河』1988.
- 图版 2 青海省文物管理处考古队·中国社会科学院考古研究所『青海柳湾』1984.
- 图版 3
1. 奥谷喬司『決定版 生物大图鑑・貝類』世界文化社 1986.
 2. 豊北町教育委員会 『土井ヶ浜遺跡第 8 次発掘調査概報』1983.
 3. 青海省文物管理处考古队「青海大通県上孫家寨出土的舞蹈纹彩陶盆」『文物』1978-3.
 4. 中国科学院考古研究所二里头工作队「偃师二里头遗址新发现的铜器和玉器」『考古』1976-4.
 5. 黄河水库考古工作队河南分队「河南陕县七里铺商代遗址的发掘」『考古学报』1960-1.
 6. 河南省文化局文物工作队「河南省郑州上街商代遗址发掘报告」『考古』1966-1.
 7. 河南省文物研究所·中国历史博物馆考古部『登封王城岗与阳城』1992.
 8. 河北省文物研究所『藁城台西商代遗址』1985.
- 图版 4
1. 郑振香「殷墟发掘六十年概述」『考古』1988-10.
 - 2~4. 中央研究院历史语言研究所『侯家庄 第 2 本 第1001号大墓 上册：正文』（中国考古报告集之三）1962.
- 图版 5
1. 中央研究院历史语言研究所『侯家庄 第 8 本 第1550号大墓』（中国考古报告集之三）1976.
 2. 中央研究院历史语言研究所『小屯 第 1 本 遗址的发现与发掘 丙编 北组墓葬』（中国考古报告集之二）1980.
 - 3~4. 中国社会科学院考古研究所『殷墟妇好墓』（中国田野考古报告集 考古学专刊丁种第23号）1980.
 5. 中央研究院历史语言研究所『侯家庄 第 7 本 第1500号大墓』（中国考古报告集之三）1976.
- 图版 6
1. 中央研究院历史语言研究所『侯家庄 第 5 本 第1004号大墓』（中国考古报告集之三）1964.
 2. 河南省信阳地区文管会·河南省罗山县文化馆「罗山天湖商周墓地」『考古学报』1986-2.

3. 林巳奈夫『殷周時代青銅器の研究—殷周青銅器総覧1—』1984.
 4. 中央研究院歴史語言研究所『侯家莊 第6本 第1217号大墓』(中国考古報告集之三) 1968.
- 図版7
- 1・2. 中央研究院歴史語言研究所『小屯 第1本 遺址の発現与発掘 丙編 北組墓葬』(中国考古報告集之二) 1970.
 3. 中央研究院歴史語言研究所『小屯 第1本 遺址の発現与発掘 丙編 中組墓葬』(中国考古報告集之二) 1972.
 - 4～6. 中央研究院歴史語言研究所『小屯 第1本 遺址の発現与発掘 丙編 乙区上下的墓葬』(中国考古報告集之二) 1976.
- 図版8 中国社会科学院考古研究所『殷墟発掘報告 1958—1961』(中国田野考古報告集 考古学專刊丁种31号) 1987.
- 図版9 中国社会科学院考古研究所『殷墟発掘報告 1958—1961』(中国田野考古報告集 考古学專刊丁种31号) 1987.
- 図版10
- 1～4. 中国社会科学院考古研究所安陽工作隊「1969—1977年殷墟西区墓葬発掘報告」『考古学報』1979—1.
 5. 朱活『古錢新譚』1992.
 6. 四川省文物考古研究所『中国考古文物之美3 商代蜀人秘寶 四川広漢三星堆遺蹟』1994.
 7. 林巳奈夫『殷周時代青銅器の研究—殷周青銅器総覧1—』1984.

The Study of the Cowrie-Shells in the Shang Civilization

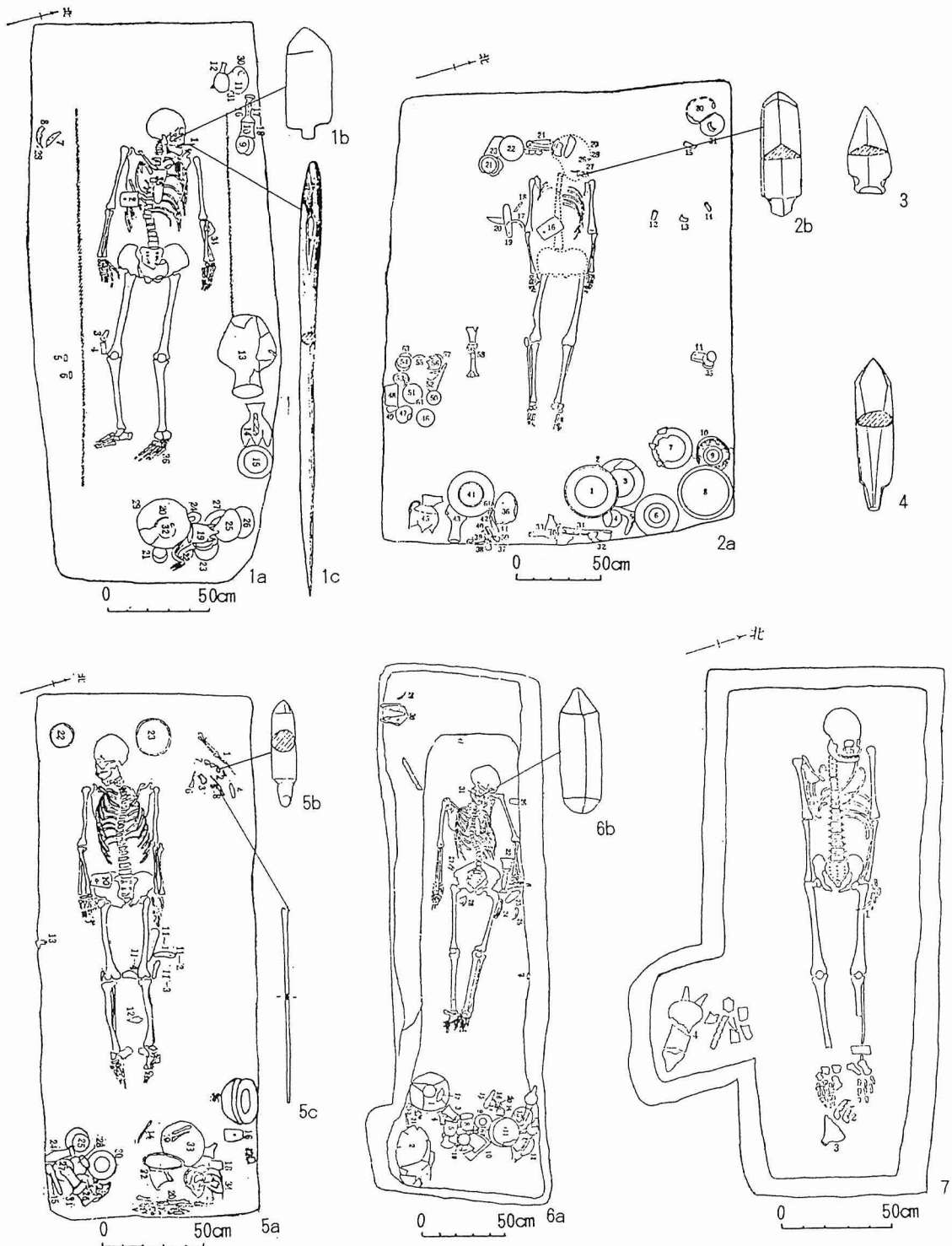
KONDŌ Takaichi

In the central China, they began to contain the cowrie-shells as the funerary object from the Er-li-tou III phase. On the other side at Qing Hai province the cowrie-shells were found out from some tombs after the middle of the Ma Chang stage. Which is older, the Er-li-tou III phase or the middle of the Ma Chang stage in the absolute chronology? If the latter is older than the former, I think the cowries may have come from the distant world west of China. Dr. Yanagida Kunio thought that Chinese people in central China loved the cowrie-shells because of their beautiful colours and

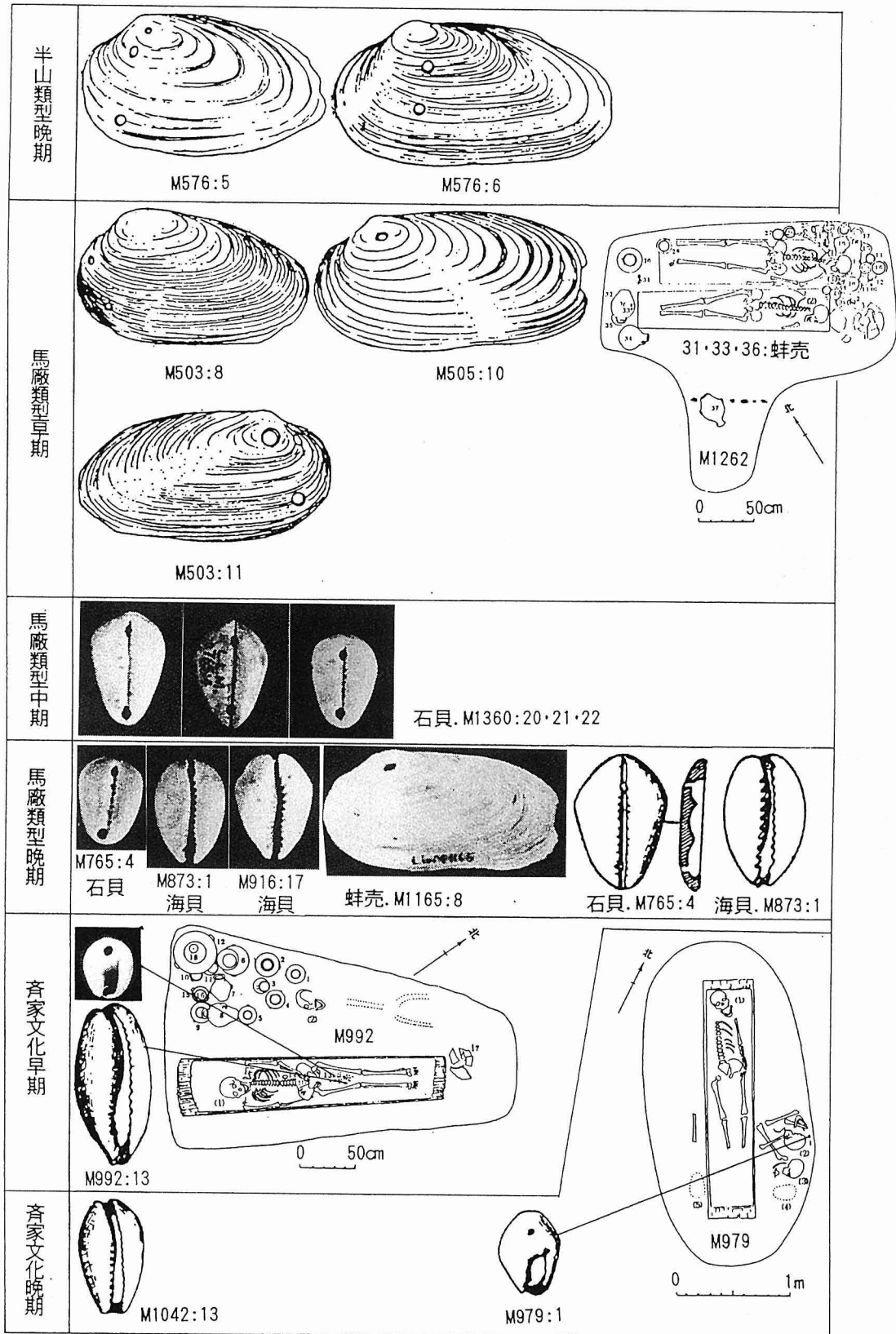
lusters, but it is not correct. While most examples were found out from the tombs of the Neolithic age and the Shang period, they had the hole made at their backs. G. Elliot Smith pointed out in 1917 the resemblance between the bottom side of the cowrie-shells and the female organ. If anyone has the cowrie-shells, he can regain the life after death. This thought develops some other ideas, the long life, the avoidance of the evil eye, the amulet and so on. The custom of the cowrie-shells in one's mouth, began with the stage of the Upper Layer of the Er-li-gang site at the tomb of No. 103, the Taixi Site, in Gaocheng in the Middle Hebei. There are three oracle bones in his funerary objects of the tomb owner and his social position was perhaps the fortune-teller same as the bone ruler of the Later Shang dynasty. Did the fortune-teller create the idea of the rebirth? In the Late Shang period, the cowrie-shells were concentrated in the capital Anyang, especially except the part of Shangdong province near Yi-du. The kings or the queens of the Shang Dynasty had been attached to the cowries, and had owned an overwhelming majority of them, compared with the middle or lower slave owners and the class of soldiers or the common people. After the II stage of Yin period, the quantity of the cowries which had been concentrated in the capital increased by leaps and bounds. I think they had gained these shells through the people of Yi district which was the lower reaches of the Huai-shui, near the sea-side of East. Judging from the distribution of the bronzes which hold the 'Zhu' (貯) inscription, there was one of the main roads from the central China to the south China, for example, from Yin-xu to Zhengzhou, to Xinyang, to Wuhan, and further to Changsha. The Shang people had made some towns as if they had driven in a wedge deeply in the areas of Jing-chu, at latest from the middle stage of the Shang period. Because they need to obtain the material of the bronzes which they made for their most important religious service to their dead ancestors and the deity of nature. I cannot say self-confidently that this road perhaps had extended to Guangzhou, to Xianggang beyond the mountain range of the south border of China at the Shang period. If it had already been opened, they had been mainly carrying the cowrie-shells from the South sea by this road. According to the inscription of the bronze 'you' (占) owned by the Hakuturu Art Museum, the cowrie-shells are naturally the symbol of

the distinguished services or the meritorious services in war, when kings and queens or the nobility in the Shang dynasty distributed them to their soldiers and so forth.

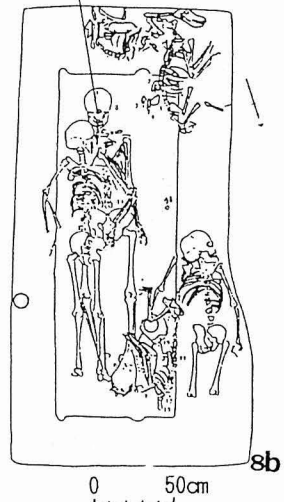
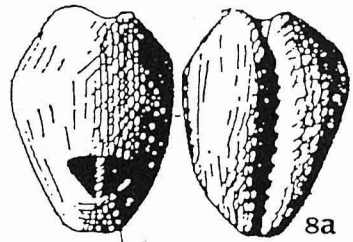
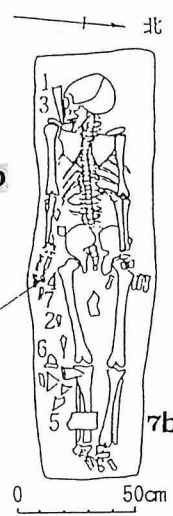
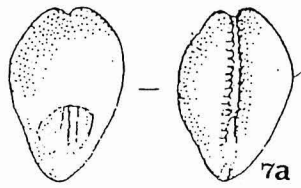
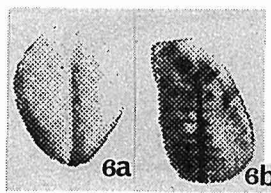
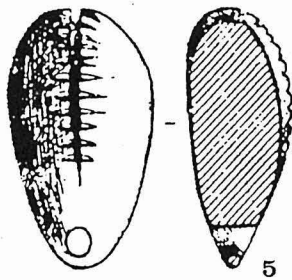
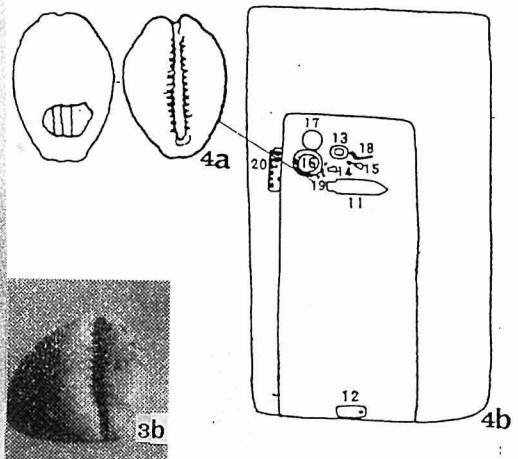
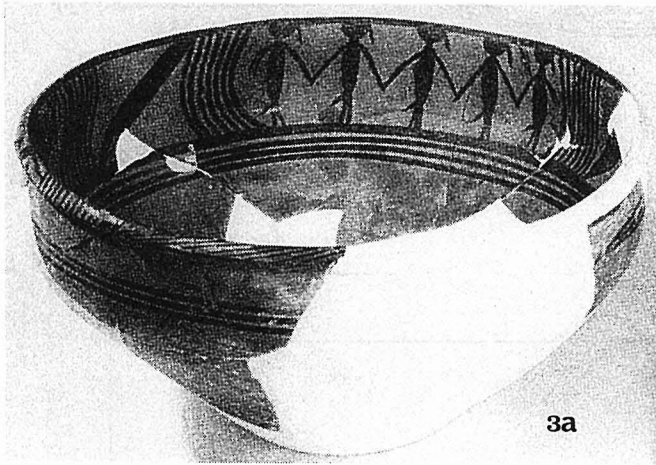
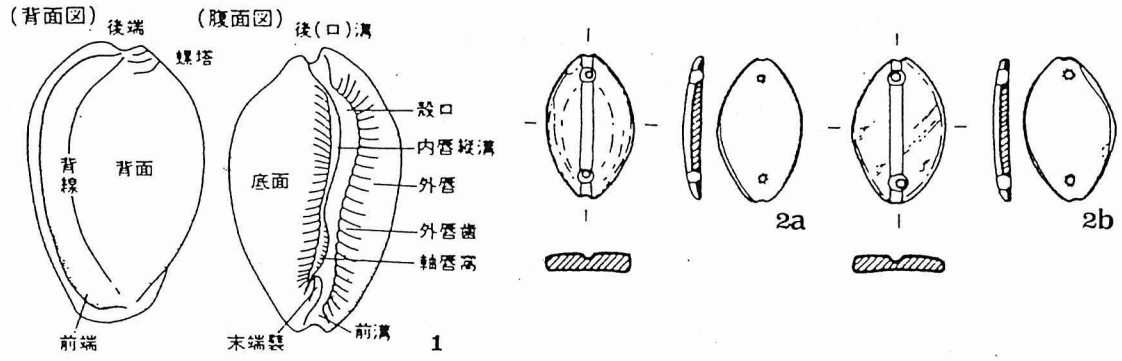
Most of the Chinese archaeologists consider the cowrie-shells as the currency from the Yin period, but I do not think so. I think the view comes later, perhaps after the middle of the West Chou period.



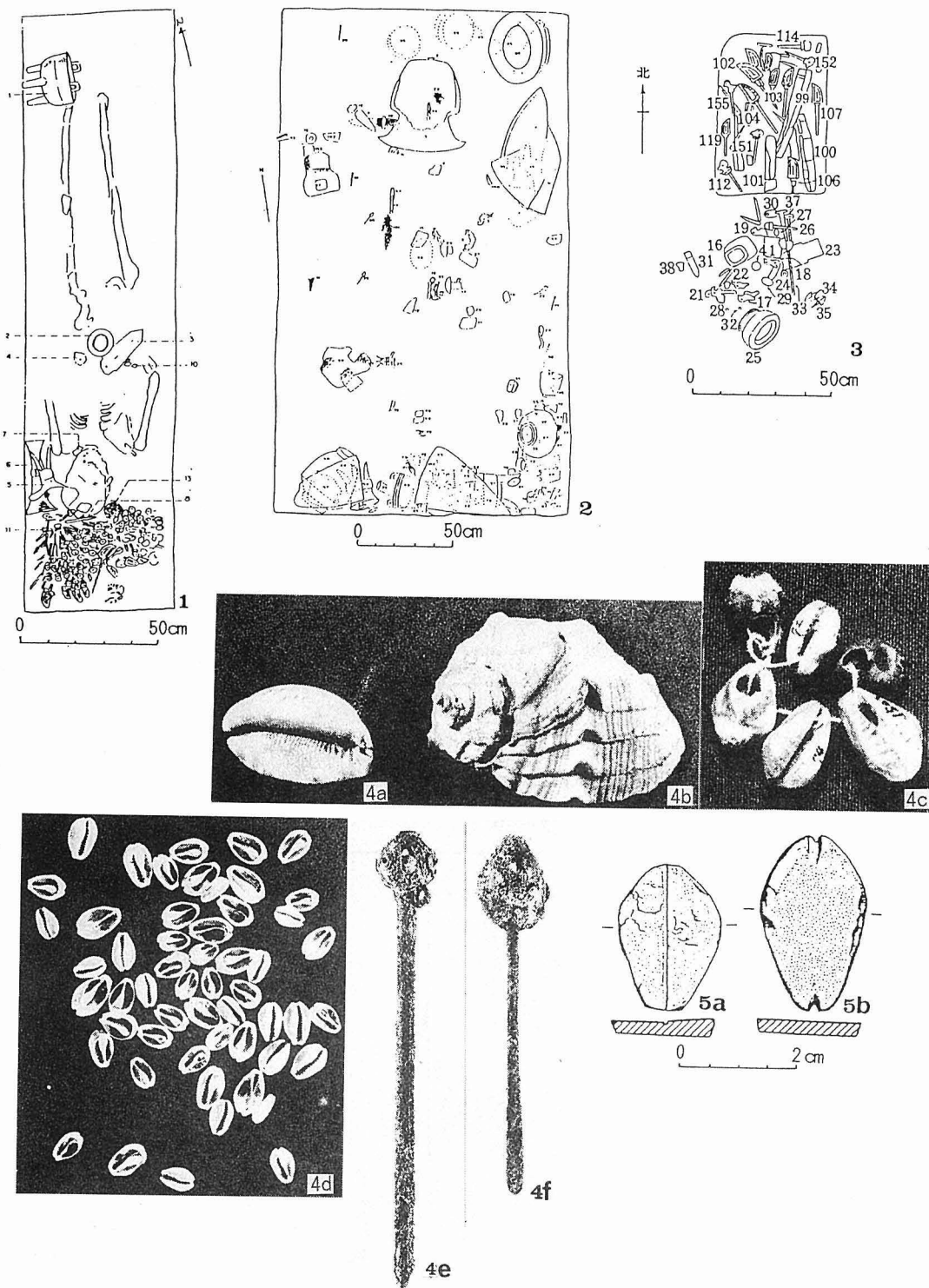
1a. 大汶口文化M275 1b. Ⅲ式玉鏃形器(含口中) 1c. Ⅱ式骨針
 2a. 大汶口文化M2110 2b. Ⅶ式玉鏃形器(含口中)
 3. Ⅵ式鏃形器(大汶口文化M229:12)
 4. Ⅴ式鏃形器(大汶口文化M296:15)
 5a. 大汶口文化M249 5b. Ⅰ式玉鏃形器 5c. Ⅰ式骨針
 6a. 大汶口文化M279 6b. Ⅱ式玉鏃形器(含口中)
 7. 龍山文化M224(5. Ⅶ式玉鏃形器) (玉鏃形器·骨針は1/2)



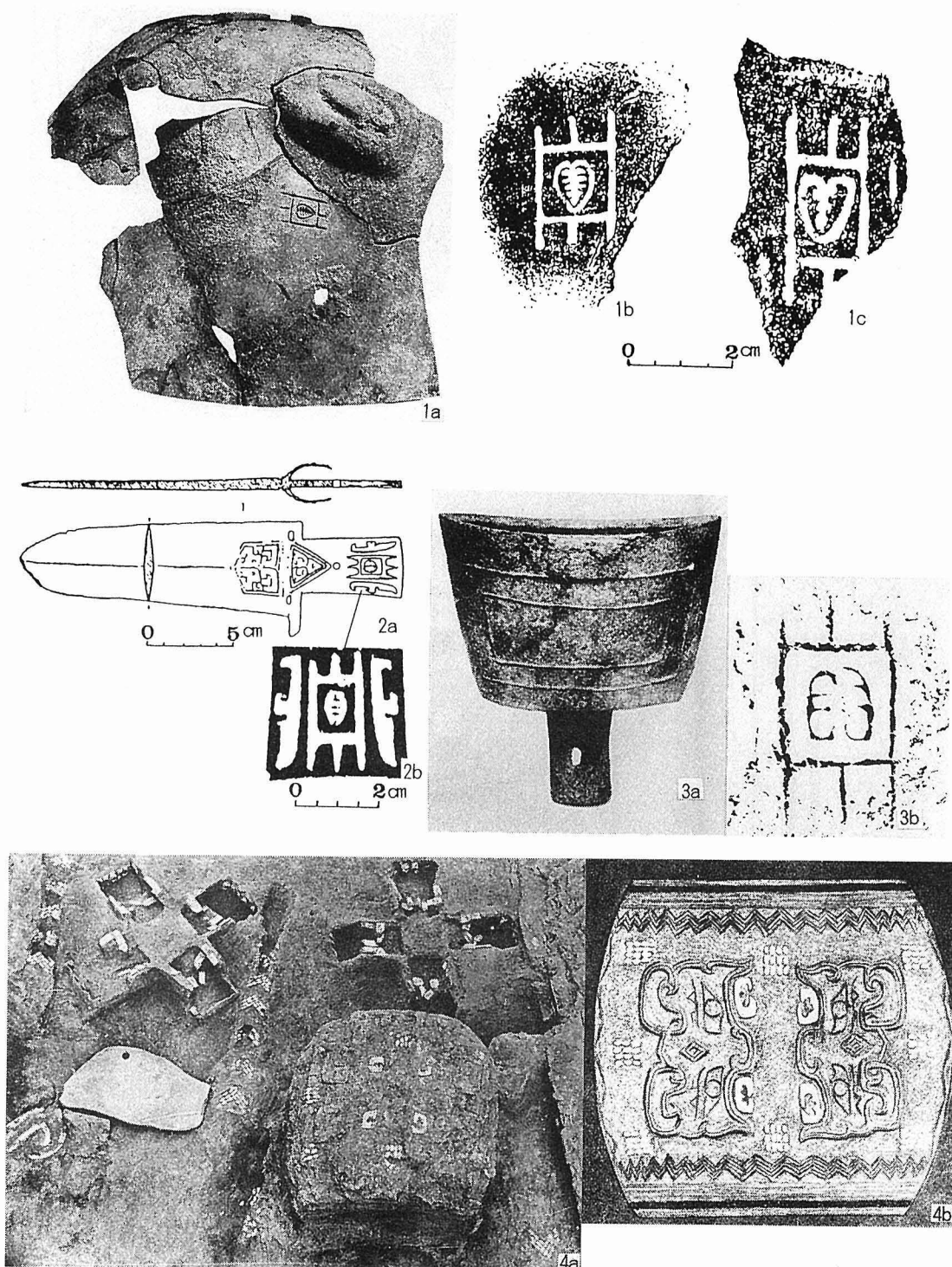
青海省柳湾墓地出土の貝類(貝は実物大)



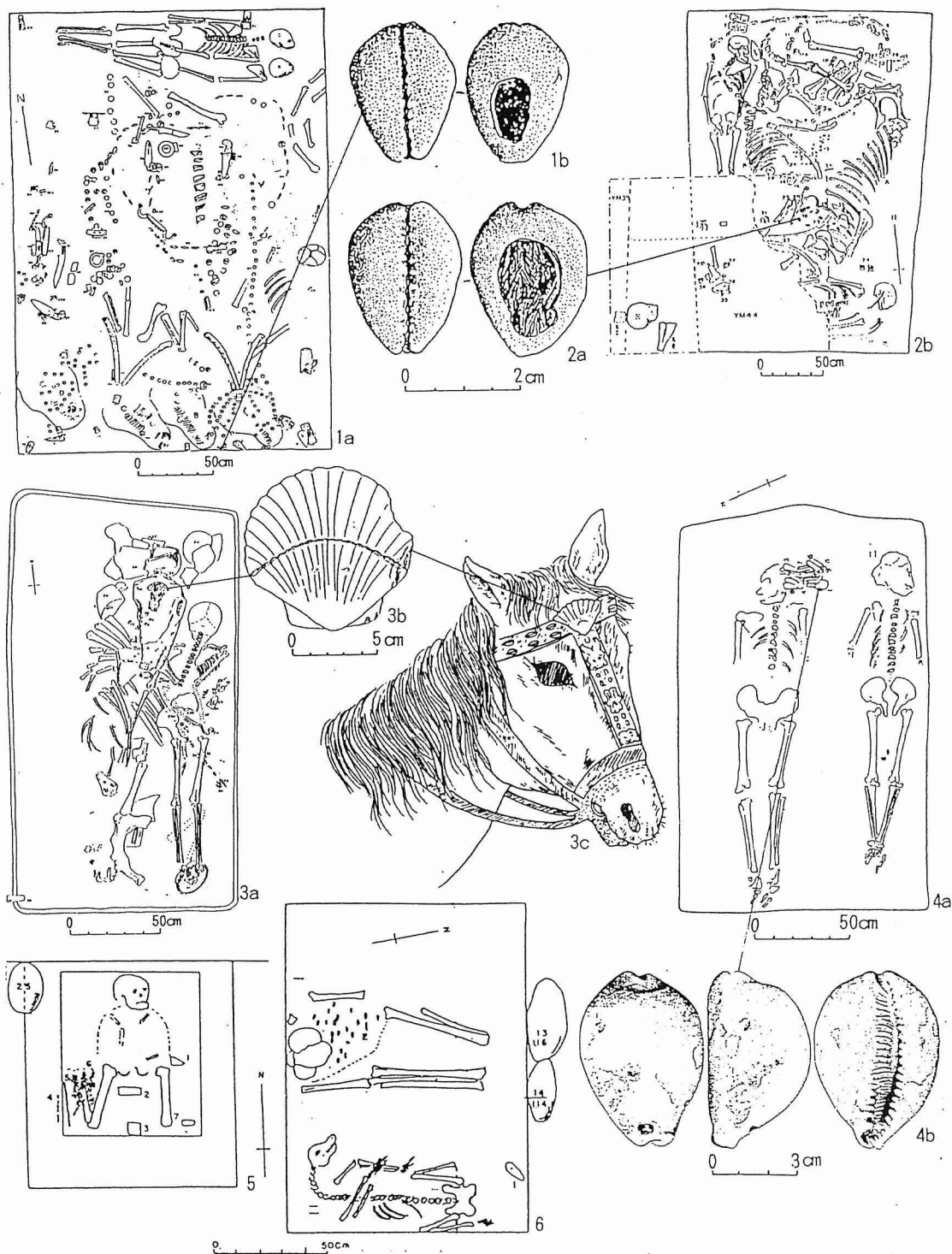
1. 宝貝の各部名称 2a・2b. 山口県土井ヶ浜遺跡出土貝製品
 3a. 青海省大通県上孫家寨出土舞蹈紋彩陶盆 3b. 海貝
 4a. 偃師二里头K3号墓出土海貝 4b. K3号墓
 5. 河南省陝县七里鋪商代遺址出土骨貝
 6a. 河南省郑州上街遺址出土骨貝 6b. 石貝
 7a. 河南省登封王城崗WT16M14号出土海貝 7b. WT16M14号(二里崗上層期)
 8a. 河北省藁城台西商代遺址M103号出土海貝 8b. M103号
 (貝類は実物大)



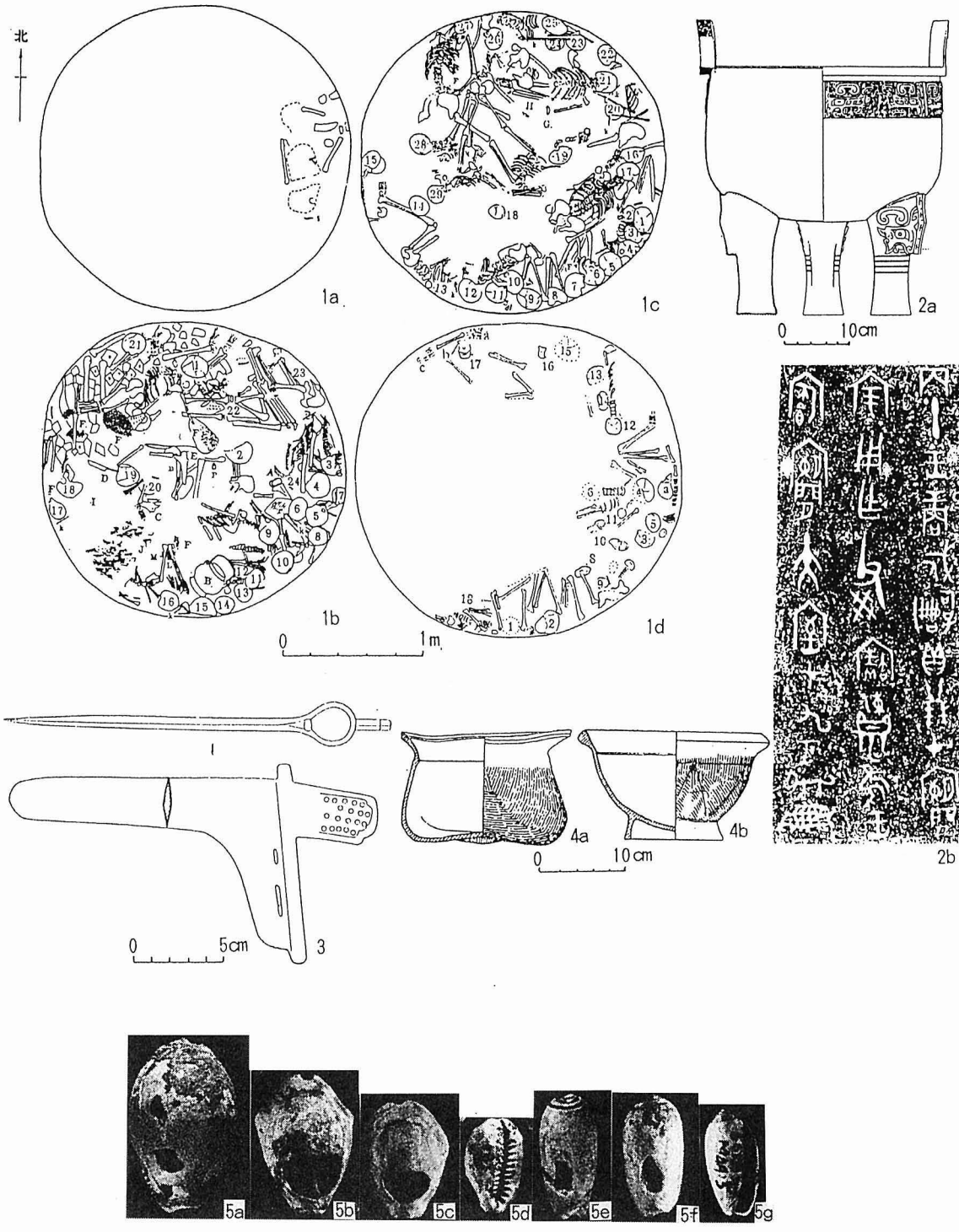
1. 河南省侯家莊1550号大墓殉葬M49号(10. 貝)
 2. 河南省小屯M331号(101. 貝)
 3. 河南省殷墟婦好墓第6層副葬品(27. 貝)
 4a. 河南省殷墟婦好墓出土ヤクシマダカラガイ
 4b. 螺貝 4c. 綠松石貝 4d. 海貝 4e. 銅丁字形器 4f. 銅匕
 5a. 河南省侯家莊1500号大墓出土蚌貝 5b. 同左



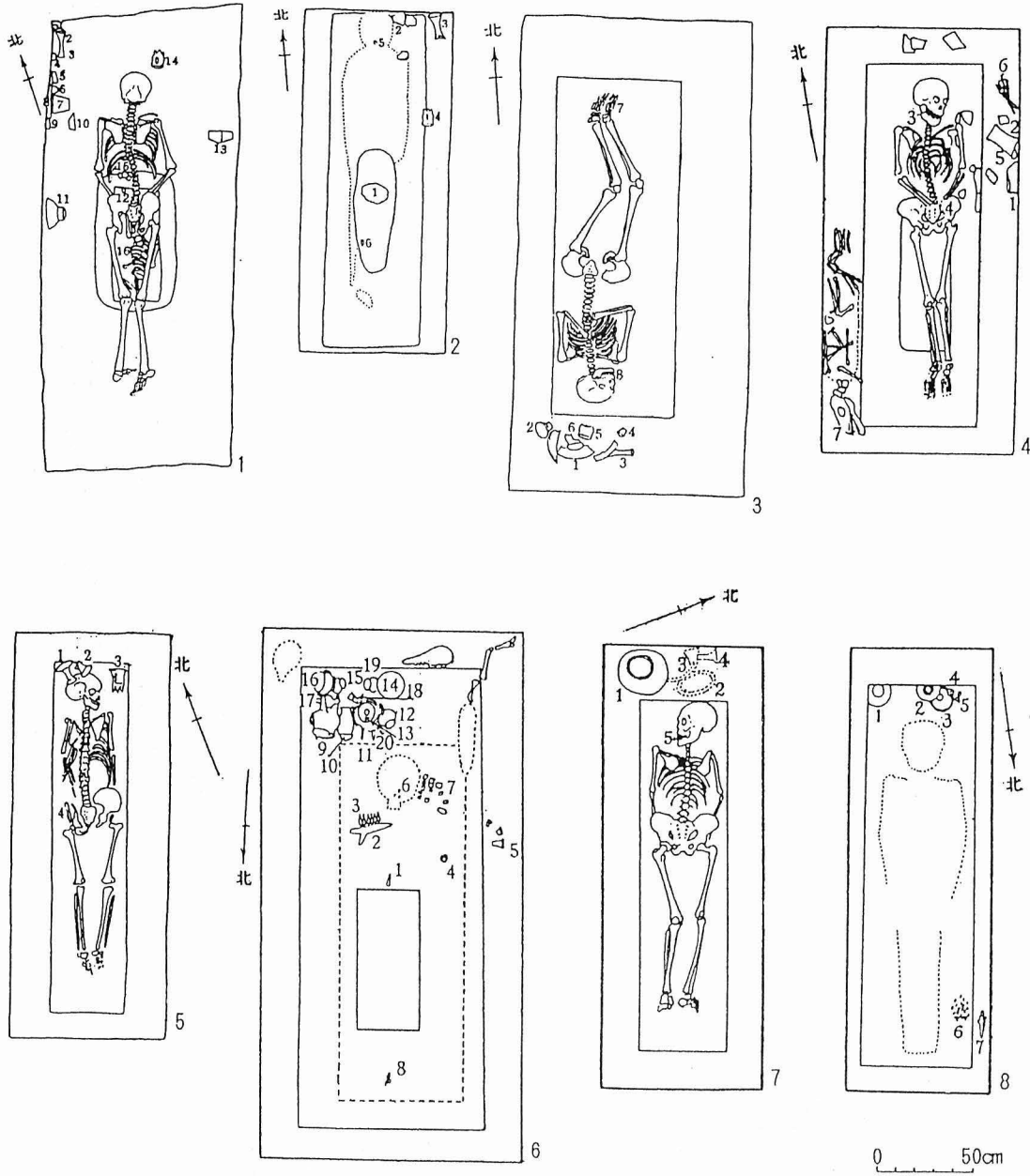
1a. 河南省侯家莊1004号大墓出土銅盂 1b·1c. 銅盂銘文
 2b. 河南省羅山天湖商墓地出土銅戈 2b. 銅戈銘文
 3a. 湖南省長沙出土鉦 [殷後期Ⅲ期] 3b. 鉦銘文
 4a. 河南省侯家莊1217号大墓出土鼓·木架子出土狀況 4b. 鼓圖形



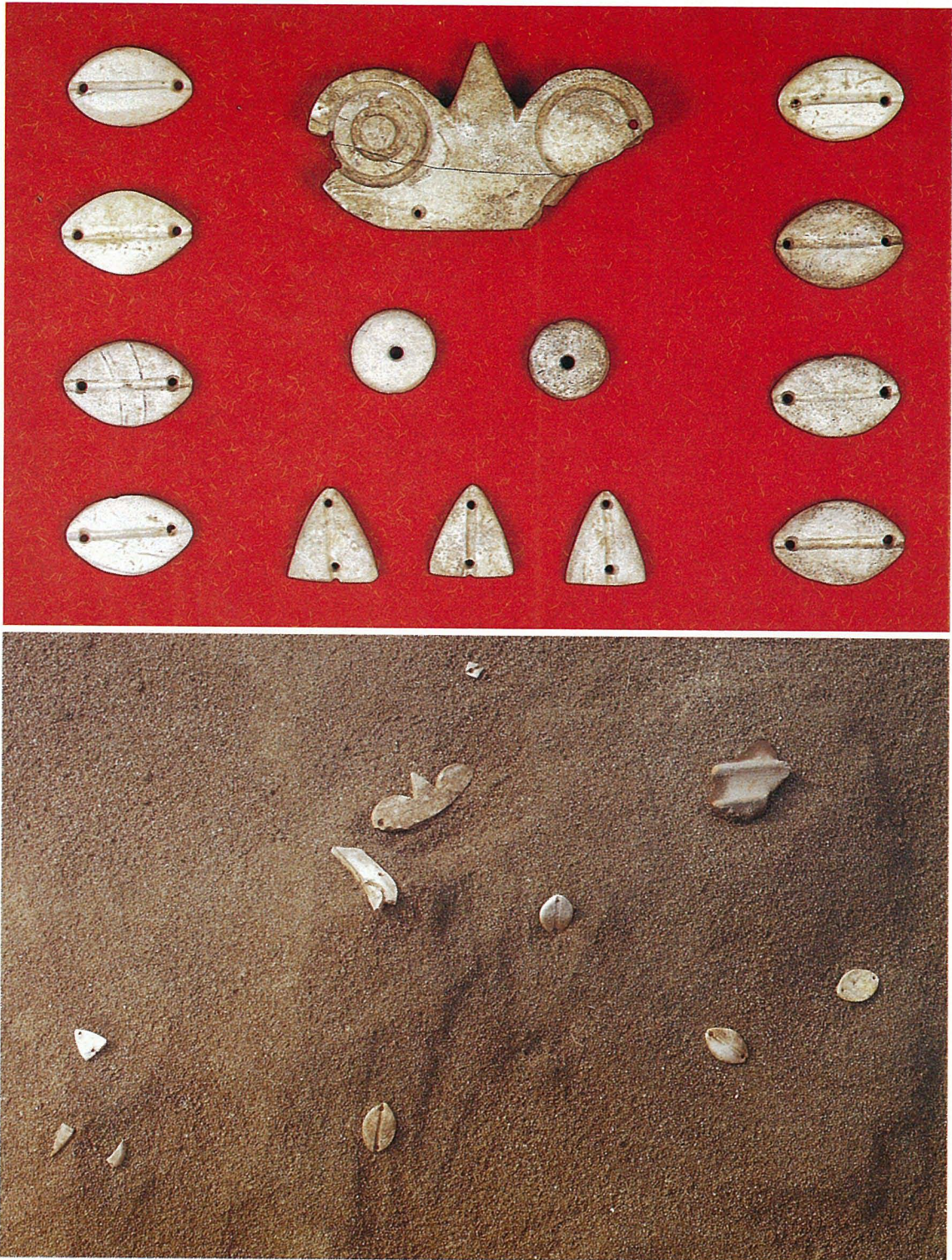
1a. 河南省小屯M20号(18. 貝飾) 1b. 貝飾
 2a. 河南省小屯M40号出土貝飾 2b. 河南省小屯M40号(13·14·30·38·41. 貝)
 3a. 河南省小屯M164号(2. 蚌質當盧 16. 貝 27. 貝) 3b. 蚌質當盧 3c. 馬飾復元圖
 4a. 河南省小屯M149号(1. 大海貝) 4b. 大海貝
 5. 河南省小屯M335号(5·6. 貝)
 6. 河南省小屯M414号(2. 貝)



1a. 后崗圓祭坑第1層人架位置 1b. 第1層人架 1c. 第2層人架 1d. 第3層人架
 2a. 后崗圓祭坑HGH10出土銅鼎 2b. 銅鼎銘文
 3. 后崗圓祭坑HGH10出土銅戈(中胡二穿戈)
 4a. 后崗圓祭坑HGH10出土陶鬲 4b. 陶簋
 5a. 殷代墓葬出土ヤクシマダカラガイ 5b. キイロダカラガイ
 5c. キイロダカラガイorハナビラダカラガイ 5d. キイロダカラガイorハナビラダカラガイ
 5e. ナツメダカラガイモドキ? 5f. ナツメダカラガイモドキ? 5g. マクラガイ



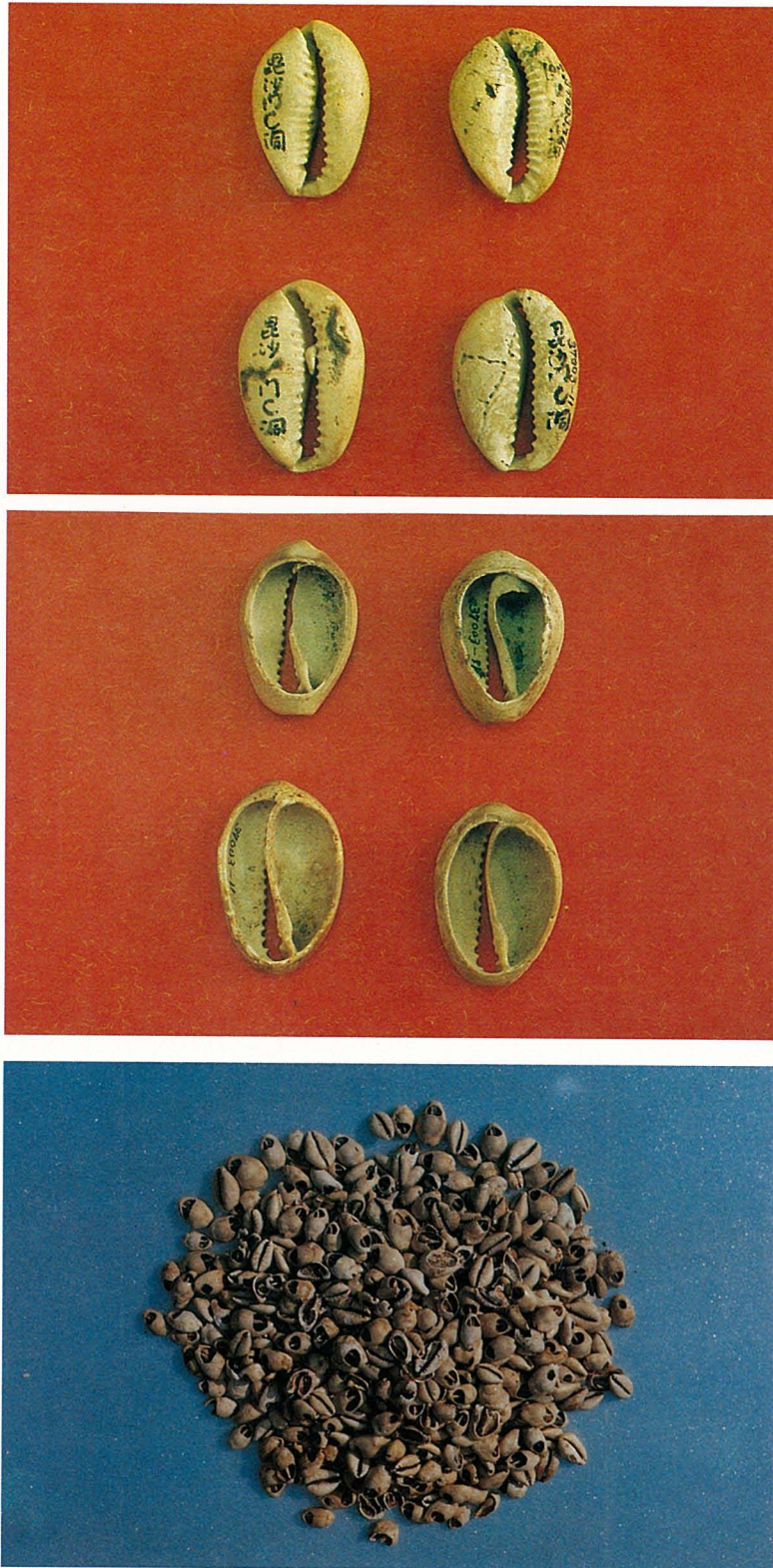
1. 白家坟西KBM10号[殷墟文化Ⅲ期] (12. 貝)
2. 苗圃北地PNM42号[殷墟文化Ⅱ期] (1. 卜甲 2. 貝)
3. 大司空村SM301号[殷墟文化Ⅲ期] (7·8. 貝)
4. 殷墟西区第3墓区M610号[殷墟文化Ⅱ期] (3. 貝)
5. 殷墟西区第3墓区M352号[殷墟文化Ⅲ期] (4. 貝)
6. 殷墟西区第7墓区M269号[殷墟文化Ⅳ期] (6·8. 貝)
7. 殷墟西区第1墓区M489号[殷墟文化Ⅳ期] (5. 貝)
8. 殷墟西区第8墓区M261号[殷墟文化Ⅳ期] (6. 貝)



上：山口県土井ヶ浜遺跡出土貝製品
下：貝製品出土状況



殷 墟 の 貝 (右端は遼寧省盧家屯貝墓出土漢代の貝)



上：神奈川県毘沙門洞出土貝

下：益都（現青州市）苏埠屯一号墓出土貝